

義があると信ずる。

ビネーといふ精神検査の創始者である佛國の心理學者は或る學校の生徒の中で九〇%が音樂的であり、一〇%が非音樂的であると言ひ、又シュツスレルは千人の子供の音樂的素質の検査の結果五%から一〇%が非音樂的であると結論したが、この中大多數は旋律聾兒の方であると思ふ。

附言しておきたいのは、色盲が盲人と異なる如く、音聾兒は聾者ではなく、只音調に對する聽覺の缺如者である。

△(2)の耳の故障

耳の構造は極めて微妙複雑に出来てゐるから故障が多い。

然し病氣と言へば病氣と言へるが、一寸注意すれば、素人にも分る故障は外聽道に多い、明るい所で、耳翼を後上方に引張つて見れば分る。

イ、耳聾栓塞は、耳垢が外聽道に松脂の如く固まりついでいるもので、極めて多く千人中八九十人はある。

ロ、外聽道異物は、耳の中に豆や硝子玉や其の他の物が入つてしまつたもの、これは面白半分にやつた結果からなることが多い。

ハ、鼓膜をつき破つたり、高い所から飛び下りたり、大きな音響によつて破つたために起る。

#### 四、特別兒の數

難聽兒は一体だけだけあるかの、簡単な調べ方は、一歌曲を歌はせて見るとよい。

◎原調で歌へるもの

◎移調すれば歌へるもの

◎節にならないもの

の三種となる。百分比で見ると大体優良なものは

第一學年	五五%	第二學年	七八%
第三學年	七二%	第四學年	八〇%
第五學年	七四%	第六學年	六五%

全く節にならないものは、全体の一〇%から二〇%である。残りは移調兒である。高等科は男女兒とも變聲期のもものが多

#### 五、特別兒童の取扱

難聽兒は概して智力が微弱であるから、それに適合した取扱を考究し、實施しなければならぬ。

(1) 先づ身体的にきかせよ。耳で音樂を聞くと言ふよりも身体で反應しつゝ聞く方が樂であり、効果が多い。

ニ、歐氏管の疾病は、風邪、鼻の病氣等にかゝると起る。

歐氏管ははれたり、カタルを起したりして起る。

ホ、外聽道狹窄症は、外聽道の骨部が肥厚して狹窄を起すもので、高度の難聽がある。

ヘ、その他、中耳カタル、耳内血管の充血、慢性中耳炎で耳だれ、内耳炎、鼓膜内陷等から起る。

△(3)の聲音機管の故障

イ、熱病、流行性感胃のために、聲帯が傷害され、自分の思ふまゝの、美しい聲が出ないために音樂を嫌ふために難聽に陥る。

ロ、生理的に發聲音域が極度に狭く、従つて歌ふことが出来ない。

ハ、變聲期

ニ、習慣的惡發聲法のため。

△(4)の精神薄弱の諸原因

イ、總べての精神活動が鈍く、従つて聽覺も微弱であり活動の出来ないもの。

ロ、不注意で、注意の集中の出来ないもの。

ハ、その他、腦病や神經衰弱、ヒステリーのため。

それでリズムミカルなマーチや軍歌式の歌曲などを、手拍子をとつたり、タクト棒や自分の指を振らせたり、

歩かせながら歌はせるがよい。低學年ではよくやる。

(2) 視覺の利用。特別兒の大多數は聽覺の不完全であるから、視覺を利用する。それで教師は音樂が示す氣分

を畫にかいたり、寫眞を見せたり、拍子を線で書いた

り假名譜を用ひたりする。これは樂譜視唱の意ではな

い。

興味中心。練習の際、出来るだけリズムミカルな言葉

例へば

タタタタ、トトトト、テテテテ、ラララ、バババ、リ

ン、等の如き言葉で節を歌はせると、非常に喜んで歌ふ。大鼓や、シホンやトライアングル等の打樂

器を彼等に與へると十分に興味をひく、私の學校で

は、兒童樂隊バンドを用ひてゐるが効果が多い。

特別指導の時間。一般唱歌時中にすれば、特別兒は

他兒童から殊に輕侮される風があるから課外の時間等

に適宜やるがよい。父兄に了解を得てやると尚よい。

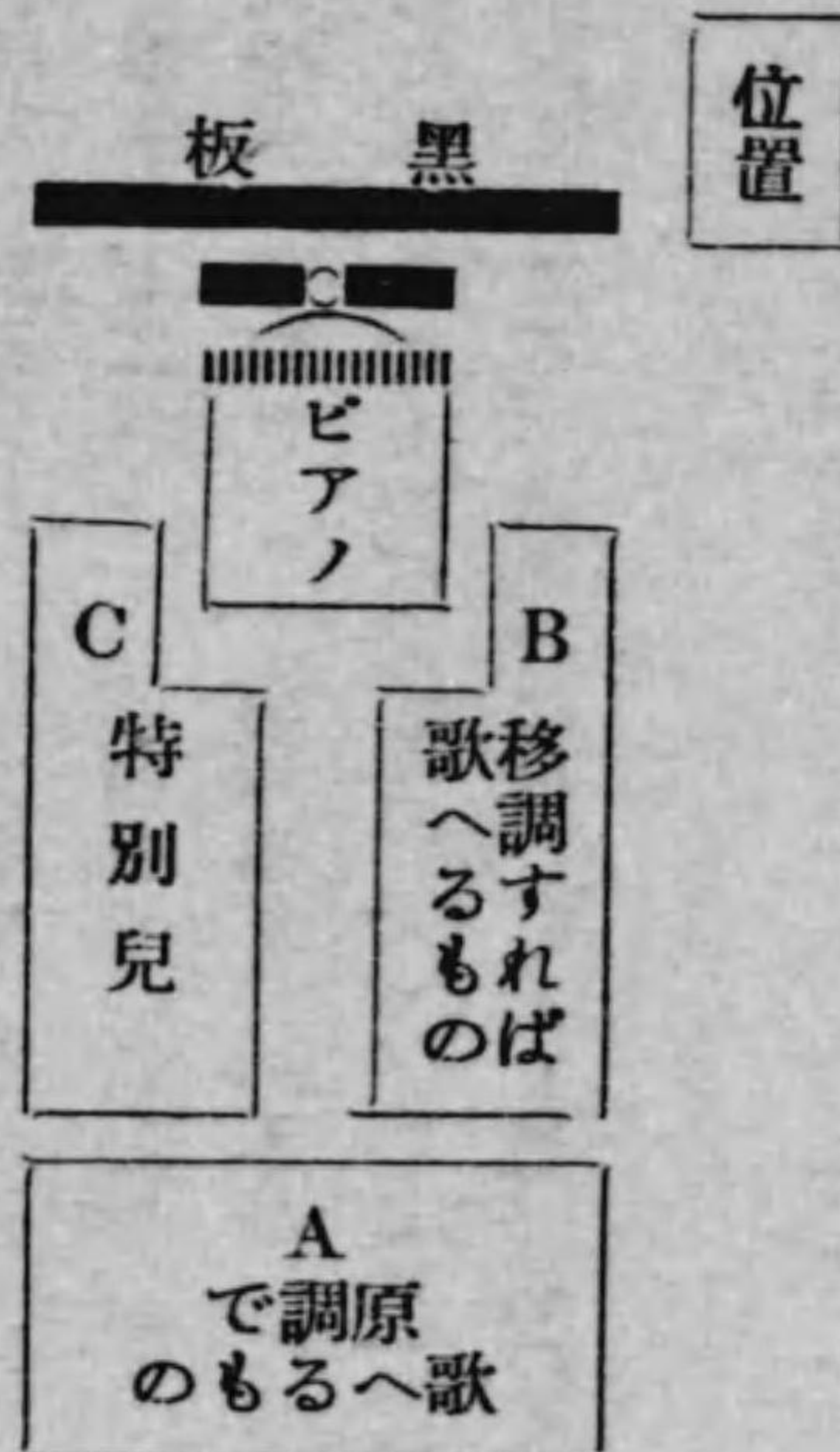
授業中特別兒の位置。常に周圍からよい影響のある

様に工夫するか、或は一緒にまとめるがよい。私の學

(5)



校では、大体一緒にまとめて、楽器の低い正確な音が絶えず耳に響く様に、又管理上都合のよいやうにしてある。兎に角他児童が特別兒と氣付かないやうに「最も低い聲の人」と言ふ名目でもつけて一緒におくがよい。



### 六、特別兒童の救済法

#### 特別兒の細分

- (1) 移調すれば歌へるもの。  
イ、高い調子に  
ロ、低い調子に  
ハ、一オクターブ下に
- (2) 與へられた音の四度、五度又は三度下を歌ふもの。

△ハの原調よりも一オクターブ低く歌ふ子供は、耳が特別に鈍感であるか、聲音機官に故障があるかである。この救済は聲音機官の故障なら教師では仕方がないが、耳の鈍感なものなら、耳に出来るだけ強い刺激を與へて、一口々に反復練習するとよい。又口を閉ぢさせて鼻音で歌はせることによつて、幾分救へる。

△(2)のイ 與へられた音よりも、四度、五度たまには三度下を歌ふものは、教師が氣をきかせて、その音まで下げてやると、更に下に逃げて行くもので、或る音に對してコード關係を持つてゐる音と聞き違へて歌ふものである。この子供には樂器を與へて、樂器の音と同じ音を出す様に工夫させるより外に方法はないやうである。

△ロの音階のソラシ・ドを最初のドレミファと同じ高さに歌つてしまふ子供は、發聲機官の故障で、高い發聲が出ない爲か、極度な發聲法の誤謬である。この子供は比較的耳がよく働くので、自分が欲求する音が出ないと言ふことを自覺してゐる。だからこの救済は、音域を擴めることにとめると、同時に發聲法を改良せねばならぬ。それには子供の發聲し得る最も低い音を主

イ、四度か五度下を又は三度下を歌ふもの

ロ、音階の中途からドレミファと同じに歌ふもの

(3) 歌詞とリズムのみを歌ふもの。

(4) 歌詞のみを歌ふもの。

(5) 全く歌はれないもの。

(6) 變聲期のもの。

△(1)の移調すれば歌へるものは聲音の美醜は別として、兎に角歌へるのであるから専ら音域を擴張すればよい。△イの高く移調すれば歌へるものは稀にある。百人中〇、五%位である。この種の子供は頸をひかせて、稍下向にし、力を入れないやうにし、移調して歌へる調子よりも半音下げて歌はせ、樂器の側にて練習し、半音下げに成功したら更に半音下げ、かくて原調にもどる。

△ロの低く移調すれば歌へるものは、移調兒の大部分である。移調して歌へる調子よりも、半音高く練習し、成功すれば更に半音上げて原調にもどる。この際聲音は出来るだけ弱少に使ふ。かくの如きことを根氣よく練習して、音域を擴め、兎に角歌へるやうにする。これ等の子供は優等兒の間に入れて、よいモデルをよく聞かれるやうにする。

音として、音階を靜かに練習し、漸次半音づゝ高く練習する。

△(3)の歌詞とリズムだけを歌つて、メロディーを歌ふことの出来ないものは、たゞリズムカルに歌詞をつぶやいてゐるだけである。この種の子供は、耳と發聲機官とが全く交渉が出来ないで、たとひ頭が或音を要求してもそれに應じた發聲が出来ないのであるか、不注意で注意が集中しないか、耳がリズムだけで満足して他を求めないかである。この救済はオルガン等をかき與へて奏させ、更に特別に山彦式に範唱を模唱させたり、アクセントを強くつけて練習すると、多少高低が出来て拍子も略正確となる。

△(4)の歌詞のみを歌ふ子供は、メロディーばかりでなく、リズムをさへ聞き得ないものである。律動的な動作は殆ど出来ない。たゞ太鼓の音や、体操の號令やならばこれと一緒にリズムカルな動作は出来るが、音樂的なメロディーに對しては全くリズムカルに聞くことが出来ない。精神薄弱、かなつんば、音聾兒である。この子供の救済は、第一打撃樂器を與へて自由にたゞかせ、リズムに對して敏感にする。又他の子供の歌ふとき手



拍子等とらせて、面白味を感じさせる。

△(5)の全く歌ふことの出来ない子供は、精神薄弱で、常にボンヤリしてゐて動作も全く常軌を逸したものであつて、音楽的白痴否全くの低能兒で、一齊教授中には救ふことは出来ない。これ等のものは集めて特殊教育をするより外方はないと思ふ。

△(6)の變聲期の取扱

六年度から高等科にかけて男女とも變聲期となる。早いのは五年の終り頃からこの徴が見える。變聲期間は六ヶ月、一年、長いのは數年間も続く様である。この時期の取扱法の大要は

- イ、唱歌を強ひない。調子を低下して歌はせる。
- ロ、發聲は弱聲本位に、且つ短時間のこと。
- ハ、兒童自身の自覺と指導、例へば唱歌時中注意しても体操時や休憩中に、叫聲を擧げたり大聲でどなれば駄目である。
- ニ、黙唱や傾聴をさせる。
- ホ、鑑賞教育を重んず(ラヂオ、蓄音機等にて)。
- ヘ、音楽大家の逸話や、音楽史の一端を授けるがよ

ト、出來得れば、樂器練習などはよい。

### 七、特別兒取扱上の諸注意

- 1、面<sup>〇</sup>倒<sup>〇</sup>が<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>な<sup>〇</sup>。一齊授業において最も面倒なものは、劣等生の救済である。秀才兒は益々進展し、劣等生は社會の慘敗者として忘れられ、犠牲にされがちであるが、この教育法は人類から見ても甚だ氣の毒なことである。よろしくこの憐れな人々を救つて同じ喜びを得させる信念と實際を持ちたい。
- 2、醫<sup>〇</sup>師<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>相<sup>〇</sup>談<sup>〇</sup>す<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>こ<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>。校醫に診斷して貰つて、治療の可否を聞き、救済の見込の有無を知ること。
- 3、叱<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>な<sup>〇</sup>。樂な學習態度を作らせる。一般兒のやうに叱つてはならぬ。教師をこはがせてはならぬ。
- 4、恥<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>が<sup>〇</sup>ら<sup>〇</sup>せ<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>な<sup>〇</sup>。態々獨唱させたり、悪い例にひいたりして、子供を餘けもの扱ひにしてはならぬ。
- 5、批<sup>〇</sup>評<sup>〇</sup>す<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>な<sup>〇</sup>。特別兒を救ふの道はたゞ愛、熱愛のみである。惡批評をしてはならぬ。
- 6、あ<sup>〇</sup>せ<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>な<sup>〇</sup>。特別兒の救済は急ぐべからず。唯着實に根氣よく除々にせよ。早急の要求は失敗と無理の基。

## 第十五章 唱歌と遊戯との關係

### 東國東郡北部

#### 目次

- 一、緒言
- 二、舞踊の本源
- 三、舞踊の目的
- 四、舞踊の効果
- 五、唱歌と遊戯
- 六、兒童の心理的變遷

#### 一、緒言

現今唱歌と遊戯とは、小學校に於けるリズム藝術教育の一部面を受持つ重要な缺ぐべからざる一分科として認められる様になつた。しかも遊戯は一分科としての獨自的地歩を有せず、法令上に於ては体操科の從屬的な取扱ひを受けてゐるにも拘はらず、小學校に於ける教育的地歩は實に大である。試みに小學校が對外的に日常教育の實際を發表する運動會或は學藝會を見る時、そのあまりに重要な部面を擔當しつゝある事に一驚を喫せずには居られぬ程である。(この事に關し

ては別に種々の意見もあるが)斯様に唱歌遊戯教育の盛大を招來したものは、實際教育上に於て、感情教育の陶冶、精神教材の徹底、体験教育の効果に於て、唱歌遊戯が大なる成果を收めつゝあるから當然の事である。併し翻つて靜かに考へて見る時、唱歌遊戯教育は、なほ混沌亂雜の過渡期の域を脱せず、頭のみ大で脚の極めて細い略型兒で、特に遊戯教育の如きは童心を持たぬ不安の状態にある事を認めずには居られぬのである。こゝに兩者の關係につき述べるに先だち、學校遊戯の基礎となつてゐる舞踊の本源、目的並びに効果について略述して見やう。

#### 二、舞踊の本源

感情を有する生物の總ては、喜怒哀樂の心情を動作に表はし、行爲に示し、その表出の度合は、刺戟の強弱の程度によつて異なる。かゝる現象は神經中樞に與へられた刺戟、精神昂奮より來る肉體の反射運動であり、吾々の肉體に包蔵する生命力の躍動、活動力の餘剰より來る無意識運動の表現、本能



的な表出であり、技巧なき動作である。而も吾々の四圍の萬象は總てリズム、メロデーを有し、吾々の神経系統を刺戟して衝動性を大ならしめる。こゝに舞踊の持つ原始的な精神本義があるのであるが、之は自然のままの赤裸々の舞踊である。之が根本原則となつて長年月の間に洗練を重ね、技巧を加へ、体系を與へられ、意匠が伴つて近代舞踊にまで進展して來たものである。

### 三、舞踊の目的

近代に於ける社會生活は、益々其の複雑性を増し、日常生活に於て人々が自己の情操、印象、心境を直接に且率直に表明することを妨げるのみならず、破壊さへしつゝある。而もこの表現に於ける壓迫と之に伴ふ内的不自然によつて、人々は自由な印象表現を拒否せらるゝ結果、遂に生理的不健康を招き、個人の自由發展に對する害毒を醸すに到るのである。斯様に不自然に情操印象心境表現を抑壓せられた人間生活に於ては、各人に自由に自己の情操的衝動と印象表現を開放さるべく、新らしく創造された媒体を必要とするのである。舞踊は肉體それ自身を媒体として使用するものであるから、思想感情傾向を自由に表現するのに最も好適である。而も人体

こそは人々に取つて自由且可能のものであつて、唯各人の特徴、體質の差異により各々の要求感情表現が變化し、その調子も異つて來るものである。人類の經驗を深め、且擴充しやうと欲すれば、心意の傾向の表現、感情と身體運動の開放自由に對する通路を拓かねばならぬ。

舞踊とは個人の日常生活に於て、肉體的に心的に極めて狭められたる限界に對する平衡方法であり、表現の自由を個人や集團に與へる一方法であるが、之が最終目的ではない。又舞踊の韻律的習練は、衛生學上よりしても、生理學上よりしても單純な体操科習練に於て排除してある利益を有してゐるが、舞踊教育の目的はもつと廣汎な意義を持たなくてはならぬ。

### 四、舞踊の効果

教育上に於ける舞踊の特殊の價值は、兒童の身體發達を促すと同時に、個性の創造性發達を促すにある。併しこれ等は實際上分離される事を許されず、混然と融合されてゐるものである。即ち生理的、機能的利益は孤立すべきではなく、慣習的運動の拘束より來る總ての不自然より漸次身體が脱却し自由を得て來ると同時に、其處には抑壓された感情と精神の

自然的開放が伴ふのである。外面的には運動區域を擴大し、内面的には新らしい精神世界の建設となるのである。かくして個性創造性を發達せしむるのである。舞踊の大なる價值はこゝにある。舞踊が教育分野に取入れられて教育界を風靡せんとする傾向にあるのも偶然ではない。

### 五、唱歌と遊戯

元來歌と踊とはリズムを母體とする双生兒である。即ち一つのリズムが音を通して表現せられた場合には音楽となり、運動を通じて表現せられた場合には踊となるのであり、歌と踊とは一つのリズムを中心として堂々巡りをしてゐるものである。故に眞實の舞踊はリズムといふ仲介者によつて一つにせられた音と運動の渾然たる表現でなければならぬ。故に小學校に於ける唱歌と遊戯は兩々對立すべく、又不即不離の關係にあるもので、遊戯より音楽を度外視すれば、遊戯は体操と何等の相違もなく、それでは遊戯の効果は半減されてしまふのである。(勿論舞踊には全然音楽を伴はぬ純藝術的なものもあるが)故に唱歌教育の徹底、リズム、メロデーの眞の感得こそ遊戯に缺ぐべからざるもので、音楽の教養を兒童に與へずして遊戯の上達を求める事は不可能の事と云はねばなら

ぬ。(こゝは遊戯が唱歌の從屬的な點があるが、舞踊の特殊の價值を考へる時、舞踊は音楽の奴隸ではない)併し前述の如く遊戯には獨自な地位は與へられてゐない。之が爲に指導上完全な一貫した体系を與へられる事なく、唱歌科との完全な連絡もないのである。その結果、教材選擇の標準なく遊戯作品は善惡共總てが玉石混淆して取扱はれるの狀態である。此處に胚胎する何ものかはないか。現在盛大(?)なる遊戯教育に不健全なる陰影のあるのはこの邊に起因するのではないか。

既に唱歌と舞踊とがリズムを中心として密接不離の關係にあることを述べた。リズムこそ兩者本質の中核をなすもので唱歌教育遊戯教育に當つては、兒童をして充分にリズム、メロデーを理解會得せしめる事が必要である。

### 六、兒童の心理的變遷

以下唱歌に對する兒童の心理的變遷と遊戯について述べて見やう。

#### 低學年

唱歌遊戯共に入門である。入學前系統的にリズム訓練は受けて居ない。この時代の兒童はリズムに對する興味が最も



深く感覺的で、メロデーに對しても同様であるから、入學前の生得的なリズム生活を最も自然的に進行せしめて、リズムカルな快味を會得せしめねばならぬ。故に遊戯教育に於ても、リズムに乗る練習、リズムを解する練習、リズムを表現する練習が最も自然であり又必要な事である。要するに此の時代に於ては充分にリズムを把握せしめ、最も具象的な表現を助成せしむべきである。

中學年

唱歌に對しては低學年時代よりも次第に現實的、表象中心のになつて来る。リズム、メロデーに對しては感覺的興味より美的興味を感じる様になる。この時代に於ける目標はメロデー感の養成と旋律美に對する鑑賞力の体得である。遊戯もこの心的伸展の過程の上に築かるべきで、低學年に於て把握したリズムの上に、更にメロデラスな表現を加へて、稍々技巧的な表出となつて来るのである。従つて具象的であつた低學年の表現より稍々表象的姿態の表出でなければならぬ。

高學年

リズムに對する美的興味の度合が深くなつて來、メロデーに對しては其の奥底に流れてゐる生命的な美しさを感じ受す

る様になる。更に進んでハーモニーの美しさに興味を持ち、音楽藝術の生命に觸れる様になる。随つてこの時代に於ける遊戯は低、中學年の上に築かるべき表象的な純粹的な表現であつて、その陶冶部面は、低學年及び中學年に於て把握したリズム、メロデー表現深化の上に、更にハーモニックな表現にまで到らねばならぬ。

以上大体について述べたのであるが、注意すべきは唱歌遊戯の目的不認識による基本練習の不足である。唱歌教授に於ては、發聲練習、音階練習のみを課して基本練習終れるが如く考へ、遊戯指導に當つては系統ある基本練習を等閑に附する様では正しい健全な發展は望まれぬ。基礎なくして殿堂を建設するの愚は嗤ふべきである。又教育圏外人士の絶讃に拍車をかけられた馬車馬的の驀進にも注意すべきである。その他考ふべき點多々ありと思ふ。要は唱歌遊戯の目的を再認識してその健全なる發展を圖るべきである。

## 大分郡鶴崎部

### 目次

- 一、序
- 二、旋律と生命
- 三、音楽リズムと運動リズムの関係から見た遊戯
- 四、唱歌と遊戯の教育的意義
- 五、唱歌と遊戯の根本的關係
- 六、歌詩の内容と遊戯
- 七、教材の選擇

### 一、序

唱歌は曲に歌詩のついたもの又は詩に歌曲のついたものを樂器或は音聲によつて表現し美を感じるものであるが、唱歌で表現する事の出来ない感じ又は美を擴充する爲に、遊戯をして、より一層美を表現し感情を表はし、また兒童の活動性を發揮させるのであると考へられる。其の唱歌の美を一層よりよく表現する爲に用ひられる遊戯は曲の方面と歌詩の方面からの二つから生れ出るものである。以下之に就いて述べよ

う。

### 二、旋律と生命

▲吾人が或る旋律的な音楽を聞いた場合、我々の生命は其の旋律の一部分となり、我々の或る潜在意識の要求を満足せしめる事が出来る。殊に兒童にありては唱歌と遊戯とが一体となつて、その潜在意識の衝動若しくは要求を満足せしめる最も容易なるものである。

大きく人間生活の上から考へても、生きたる宇宙、生きたる自然は、無限に流るゝ旋律となつて居り、吾人の生命すべては、この宇宙、この自然、言ひかへると無限に流るゝ旋律の中にあると言ふ事が出来るのである。

地球と太陽の間にも一定の旋律があり、天界のやみにまたしく星にも、春を迎へて小さく野に咲くすみれにも。

かくの如く旋律は宇宙の根本原則である。

人間總べての行爲の根本は感情である。宇宙の根本原則である旋律が、この感情を波うたせ、其の熱情の加はつた場合吾人の發したるものが唱歌とか遊戯となることは當然の事である。

嬉しい時には、手の舞ひ足の踏む處を知らず踊り上つて喜



び、聲に身振に此の感情を表現し、悲しい場合にも、泣き、わめき、聲をあげ身を振はして慟哭する。  
かうして發生したものは、根本的、若しくは初期の藝術の形式、即ち原始的な秩序も意匠もない自然のままのものである。

處が人間の審美性が此の原始的な初期の唱歌とか、遊戯とかも永久に満足出来るかといふと決してさうでない。喜怒哀樂の精神的表現は永い年月の間に洗練を重ね、技巧に技巧が加はり、秩序や意匠が伴ひ、今日の如き立派な藝術的な美の域まで達したのである。

かく旋律は吾人の生命の流れと共に無限に伸びて行く。旋律の美は即ち生命の美である。

旋律は即ち吾人の生命である。  
故に生命である旋律方面を満足させ、又それを伸ばす爲に唱歌と遊戯とが必要となつて来る。

### 三、音楽リズムと運動リズムの関係から見た遊戯

▲學校体育教材として文部省が遊戯を要目中に採り入れたのは如何なる根據によるか、要目の示す「唱歌遊戯は生徒兒

藝術であるが、又音楽の聴覚神経に對する反應が全身の運動中樞を刺戟し、其の結果、身体の全身運動が鋭敏に作用して生ずる一種の反應作用的現象であると言へる。

詳言すれば遊戯は唱歌の刺戟によつて生じた、複雑な、心的現象、感受性の發動を最も普通、自然な發表本能によつて的確に動作に表現する能を養ひかねて感受性の發動を豊富にし、心身を統制する基礎的教養をなして各部の機關機能の向上發達を練るのであると言ふことが出来る。

複雑なる刺戟、微妙なる刺戟、愉快なる刺戟、精妙なる刺戟、この至上至妙なる音楽の刺戟によつて、物の響に應ずるが如き力と、之を表はす能とを、自律的に、自覺的に練り以つて心(精神)身(肉体)の統制を計り、統制力を練磨し審美的教養、情緒、情操の教育、リズムの訓練、創作鑑賞の能を涵養するものであることも出来るのである。

此の刺戟は、音楽が最も適切なもので、音楽に勝る客觀的事象は他にないのである。音楽が如何に本質的なものであるかと言ふことは少しも理解なきもの、少しも努力を拂はないものにも、作用すると言ふ點でも明かである。

如何なる號令も、如何なる気合も全く遠く及ばない。特殊な地位にあるものである。

童の自然の活動性に適應して唱歌に伴ふ表情的動作により、全身の發育と健康とを助長し、快活な精神を養ふを要目とする。行進遊戯は、調律的な各種の優美な行進に慣れさせ、且つ各種の隊形に於ける團體的行動に習熟せしめつゝ、全身の健康を増進し同時に快活規律及び協同の精神を養ふものである。又調律的で圓滑、輕快な全身的动作によりて、快活溫雅な精神と端正優美な容姿とを養ひ、以て心身の圓滿な調和的發達をはかり、身体を強健ならしめるものである。」とある。表面的に述べると以上の如きは十分であるかも知れぬが、一歩更に進んで内面的に考察すると、かゝるダンス教材が價値ありとして採り入れられる理由は、むしろ身体教育と言ふ立場からではあるまいか。

即ち音楽リズムによる身体教育と言ふ點である様に思ふ。勿論ダンス教材が女性の体育教材として、又調律的訓練教材として、將又自然性教養、審美的、情操的教養材として最も妥當なものであることは、今迄にも屢々述べたのであるが其の最も根本的なものは次の點にある様に考へられる。

### 四、唱歌と遊戯の教育的意義

▲遊戯は感情をリズムミカルな肉体的動作によつて表現する

靈妙な人間の感受性は、音楽の示す輕妙なる節奏、鮮麗微妙な旋律、調和混一せる和聲によつて、生じたる心的現象を最も、自律的、最も意識的に而も最も興味的に、肉体と精神とに連絡し、肉体を統御、統制して動作に表現せしむるものである。

而も之れが人間の最も普通、自然な發表本能の作用によるものである。これを化育しこれを誘導し、善導して、以て他の如何なる方法を以てしても、容易になし得ざる發達を遂げしむることは、教育上確に重要なことであると言はなければならぬ。

### 五、唱歌と遊戯の根本的關係

▲綴方を教へる者は、文字、文章、文法を教へて後、創作を指導する。遊戯にあつては文章文法は基本的動作、歩法演習である。これと唱歌との關係を明瞭にしてかゝらねばならぬ。

即ち唱歌リズムと動作運動(運動リズム)との關係修練、これが重要な仕事でこれを十分に修練せねば唱歌リズムを利用した教材は殺されて徒らにその形骸を保つに過ぎぬものとなる、リズムの緩急、アクセント、大小、高低等が運動リズム



の肉体の空間的、關係を認識させ、力、時間、空間と、運動の意識を体现させ、やがては音楽の肉体的翻譯に迄導き、唱歌と身体とが、全く融合して一体となる境地に導き音楽の刺戟に對する感受性が充分に深められ、創作能、鑑賞能が涵養される所に價値が生ずる。

而してこの演出される迄の時間的過程が貴重なるならひ所となるのである。斯くしてこそ、舊來の如く模倣教材のみでなく新しい創作的教材が生れるのである。

綴方を作るが如く、その唱歌に即した遊戯が容易に而も各自各様に即座に創作されるやうになるのである。

音楽リズムを使用するものが既作のダンス教材、他人の振付けたものを演じてゐる間は枝葉未節を缺いてゐると同じである。やがて自分々の個性から音楽の特性と同化し融合した遊戯教材が生じなくてはならぬ筈である。

それは丁度寫生する人が、風景なり、靜物なりから得る直觀々察、印象等によつて各自が思ひ／＼に描寫する様に、又綴方にあつて、飛行機と言ふ作文の題が出た時、各自の飛行機に關する生活を記述し各自に内在せる體驗、感情を綴るが如く音楽の姿を形(肉体)を通じて表現する所に遊戯の生命がある。但し現在の學校体育で行ふダンスは人、所、教師、時

作)に表はして内容の助けとするのである。

以上は歌詩が先に生れ、曲が先に生れた場合であるが、動作が先に生れ、それに合せて歌詩又は曲の生れる場合もあるのである。

### 七、教材の選擇

- 1、季節と歌詞とが合致してゐることはより効果的である。
- 2、寒暑と運動量の上から考慮する。
- 3、歌詞歌曲が子供の心理に合致したものを選擇すること、學校個人によつて種々異つた想像力や運動能力、表現能力を持つてゐるから各學級各個人の素質、能力等もよく考慮して選擇する。
- 4、動作が非常に複雑なものは採らぬ。簡單にして興味あるもの。
- 5、振付の質に對する注意。  
歌詞にとらはれ過ぎ一つ／＼の動作が、そのまま歌詞の翻譯であつたり或は楽曲の表題に捉はれ過ぎて子供の想像の餘裕すらない様なものはよい遊戯とはいへぬ。
- 6、美的要素を充分具備し演者自身の精神向上に力あると同時に鑑賞的立場からも充分藝術的のものであること。

間等の種々な束縛により一定の模式的教材によりて臨畫する如く行ふのも又止むを得ないことと言ふべきである。

遊戯の本性は何であらうか。

それは前にも述べた如く、精神活動をリズムカルな動作で表現したものである。

従つて無音楽遊戯が最も唯一の到達點である。

### 六、歌詩の内容と遊戯

▲先づ歌詩を読み作者の立場を想像し曲を味はつて歌と曲との心持を混合して第三の心持を生み出す、此の感情の流れを對他的に實感に近い感情を起させる様に連ねて行く、此の第三の氣持より得たる、尊重、又は悲哀、或は愉快等々の感情(勿論、曲だけでも歌曲だけでもその氣分はよく出るが)それに適した動作をする事によつて本人は勿論の事、他人をして其の境地に入れしむる事が出来るのである。

又下學年では歌謡の内容より來るものよりも、歌詩を其のまゝ動作に仕組でゐるものが多い、花が咲いたと言つては兩手を上に挙げ作圓したり、木の葉が散ると言つては兩手を上から指を開いたまゝリズムにあはせて下したりする、つまり低學年は内容の理解が困難だから、歌詩をそのまま遊戯(動

## 宇佐郡第五部

### 目次

- 一、序
- 二、消極的希望
  - 1、動作をしながら歌ふことの問題
  - 2、發聲について
  - 3、教材の選擇について
- 三、積極的希望
  - 1、教材の形式と内容とを体得し之を表現することを重要視すること
  - 2、動作が楽曲の形式と内容とを良く表現すること
  - 3、藝術的鑑賞を重要視すること
  - 4、遊戯本能の満足を重要視すること
  - 5、創作的意識の伸展を重要視すること

### 一、序

唱歌と遊戯との間には極めて密接な關係がある。唱歌遊戯に取扱はれる唱歌が少なくとも唱歌教授の方針に反することなく、唱歌教授の効果を阻害せぬ様にと考へる時、こゝに唱



歌教授の立場から見た唱歌遊戯の指導に對する消極的な希望が生れるわけである。又單に唱歌教授と唱歌遊戯との關係を圓滑ならしめ様といふ様な消極的な見地から之を眺めるに止らず。更に兩者の關係を積極的に進めて考へる時には、こゝに唱歌教授の立場から見た唱歌遊戯指導に對する積極的な希望が生れる。即ち唱歌遊戯の存在することによつて唱歌教授の効果を一層有意義ならしめると同様に、唱歌教授の立場から云へば、唱歌遊戯の存在によつて、唱歌の形式及内容の体得と之が表現とを一層徹底させることの出来る様な關係に置くといふことである。私は唱歌教授の立場から唱歌遊戯指導に對する消極的な希望積極的な希望とを左に述べてみたいと思ふ。

## 二、消極的な希望

### 1、動作をしながら歌ふことの問題

唱歌を歌ひながら動作をつけるといふことは一般に行はれてゐることであるが、この問題は十分に研究してみなくてはならないことである。およそ運動をし乍ら規則的な聲を發するといふことは根本的に困難なことであつて、専門家の行ふオペラの様なものに於てもその所作は普通のドラマよりも非

常な制限を受けて居り、重要な歌の部分に於ては極めて所作が少ないといふことである。況んや幼弱な兒童に於ては歌ひながら、動作をつけるといふことは極めて困難なことである。云ふ迄も無く、又實際に行つても十分に効果をあげ得るものではない。一面から云へば不自然な發聲を強ひるといふ弊害があるものと考へるのである。それも四肢のみを用ひる簡單な動作であるならばまだしもであるが、多少なりとも軀幹の運動を伴ふものに於ては不能であるといつても過言ではないと思ふ。即ち理想から云へば動作をしながら歌ふといふことは極力避ける様にした方がいいのである。實際問題としては如何に解決するかといふことを少し考へてみたい。先づ歌曲を唱歌として十分に体得させて置くといふことが根本問題である。唱歌としてその教材の形式及内容を十分体得して置き、指導者が小さい聲で歌ふとか、或は樂器で彈奏してやれば、歌詞でも曲でも直ちに兒童の頭に浮んで來る程度に体得させて置くことである。そうすれば必ずしも各自が大きな聲を出して歌はなくとも動作をつけることが出来ると思ふ。又唱歌を歌ふ組と動作を行ふ組とを別にして、交互に行ふといふ様な指導方法もあるし、運動會等の場合に於ては、他の學級の兒童に歌はせるといふことも出来る。最も有効な方法は蓄音

器の利用である。近來この方面に利用出来る様なレコードも出來て來たし、今後益々出て來るであらうと思ふ。勿論擴聲装置のものは尙一層有効である。

### 2、發聲について

唱歌遊戯は、校庭で行ふとか又は廣い屋内体操場、講堂等で行ふ場合が多いのであるから、唱歌教室で歌つてゐる場合と環境が著しく異なり、反響の状態が悪い爲に、兒童の聲量が不自然に増大される場合が多い。その爲に折角唱歌教授の方で骨を折つて建設した發聲上の良習慣を破壊される虞があるから、この點に對しては特に注意して貰ひたいと思ふ。又設備の不完全な爲に樂器をはなれて歌ふ様なことも屢々起ることであるが、その歌曲の主音をとりあやまると、聲が非常に低すぎたり、又高すぎたりして、兒童の聲域を無視した發聲を強いる様な結果になるから、この點に對しても十分注意せねばならぬと思ふ。

### 3、教材の選擇について

多くの唱歌教材中歌詞及曲の形式と内容とが唱歌遊戯として動作的を表現するのに都合のよいものを探ふといふことは勿論であるが、その際に注意を要する二三のことがらを述べて見よう。即ち音楽鑑賞に對する兒童の心理的發達の過

程をしらべて見ると、先づリズム感覺の發達に始まり、次に旋律の鑑賞に進み、更に和聲の鑑賞に進むといふ事は多くの心理學者の證明するところであり、又多くの實際家の体験して來た事實である。各民族に於ける音楽發達の経路を見てもこの階段をふんでゐるのである。唱歌教授の方面に於ても低學年に於てはリズムカルな教材を與へよといふのは、こゝに根據を持つのであつて、尋常科第三四學年程度では旋律的なものを與へ、更に進んでは和聲美をも味はせやうといふのが教材選擇上の一般的標準である。

## 三、積極的な希望

### 1、教材の形式と内容を体得し之を表現することを重視すること。

唱歌としては体得した教材の形式と内容をそのまま唱歌遊戯として表現するに止まらず、唱歌遊戯として學習したこゝによつて、更に確實に教材の形式と内容を体得させ、且つ之を表現する様に指導しなければならぬ。今日の實情はむしろ唱歌教授によつて体得したものが、唱歌遊戯とした爲に却つてその形式と内容とが、不確實になる様な結果になることが多いのである。即ち唱歌遊戯をして學習したことに依



つて、單に唱歌として學習した場合よりも、兒童はその筋肉感に訴へて、音の高低なり、リズムの形式等を、より多く確實に体得し、歌曲の表現する内容をより深く体得して之を表現する様に指導しなければならぬと思ふのである。

2、動作が楽曲の形式と内容を良く表現すること。

やゝもすると唱歌遊戯の動作が、歌詞にのみ拘泥して、楽曲は動作の拍子をとる一方にしかならない様な結果に終ることがある。場合によると歌詞の表現も、單にその語句の末にとらはれて、歌詞の眞味すらも表現しないものがある。この様な動作は唱歌遊戯として頗る價値のうすいものであると思ふ。

唱歌遊戯の動作は楽曲の持つた形式内容と、よく一致したものでなくてはならない。例へば楽曲のリズムと動作のリズムとがよく一致してゐる様に表現するといふことを重要視しなくてはならないのである。

3、藝術的鑑賞を重要視すること

唱歌遊戯の指導は、徒に分解的の取扱にのみあせらず、歌曲としても、動作として充分綜合的に之を鑑賞させることを重要視しなくてはならない。即ち歌曲及動作の藝術的鑑賞といふ方面に特に意を用ひなくてはならないと思ふものである。

る。従つてその教法の如きも歌曲の形式内容を十分に体得させ、且つ之を鑑賞させて學習動機を喚起し、更に動作全体を綜合的に鑑賞させて、その後に分解的な取扱に入り、最後に又之を綜合して鑑賞させるといふ様な段階を経て指導することが肝要である。

4、遊戯本能の満足を重要視すること

特に低學年兒童に授ける唱歌遊戯としては、その動作があまりに型にはまりすぎて、規則正しい形式を強いた様なものは、兒童の遊戯本能に背逆するものであつて、心理的な見地から遺憾な點があると思ふ。何歩前へ出て手をどういふ形にして、どの角度に上げ、又左へ何歩、右へ何歩といふ様な動作の固定したものは兒童の心理に適合しないと思ふ。勿論統一美を味はせるとか、一定の動作によつて訓練するといふことも極めて必要なことであるし、或程度迄はその方面の訓練が出来なければ團体的な遊戯の價値はないであらう。しかし可成り自由な動作の中に適當な統一があり、自由の中に統一を味ひ、統一の中に自由な活動をして、兒童の遊戯本能を満足させる様な動作といふことを可成り重要視しなくてはならないと思ふ。

5、創作的意識の伸展を重要視すること

によつて満足することは出来ない。ある程度の基本的な形式を受容させ、之を十分類化させて、創作的意識の活動によつて表現する様にしなければならぬ。

又兒童の鑑賞力を高めて置かなくてはならない。鑑賞力の低いものは創作的意識の發現が行きつまり、表現形式が結局型にはまつてしまふといふことになつてしまふのである。

一面からいふと兒童の創作とか、創作的意識の誘導といふ様な指導方法をとるには、指導者に相當な實力が無くては又不可能である。

要するに唱歌遊戯の理想的な方法としては、常に兒童の創作的意識の誘導及伸展といふことを重要視して取扱ひ、創作的な表現に迄到達することであると思ふ。

## 第十六章 鑑賞指導の實際

### 北海道郡南部

#### 目次

#### A 鑑賞教育

イ、鑑賞の言葉の起源及び其の由來

ロ、鑑賞とは何ぞや

ハ、過去に於ける音楽教育と將來の音楽教育

B 鑑賞の實際(範圍)



## A 鑑賞教育

イ、鑑賞の言葉の起源及び其の由来

鑑賞なる言葉は、今を去る約二十九年より藝術教育の言葉の中に包まれて漸次發達して今日に及んだと言はれてゐます。藝術教育は一八五一年彼のロンドン市に於いて第一回世界博覽會が開かれてゐます。然し此の時は音楽と何等關係を持たなかつたのであります。次に一九〇一年獨逸のドレスデンに於いて第二回藝術教育大會が開かれまして、繪畫、彫刻、建築と云つたものが其の大會の中心となりましたが、此の時も音楽は關係を持たなかつたのであります。次に一九〇五年の秋、獨逸のハンブルグに於いて第三回藝術大會が開かれて、此の時、初めて音楽と体操とが問題の中心となり、盛んに研究發表或は質疑應答等が行はれたやうにありませう。其の時、彼の米國のデソアールが音楽の鑑賞に付き次の様に發表したやうに言はれてゐます。デソアールの音楽の鑑賞は兒童は唱歌を學ぶことにより色々な束縛より離れて最も自由な境地に到達する。随つて音楽の終極の目的は(一)兒童を幻想の世界に導き創造まで行かねばならぬ。(二)吾人を壓迫する現實より離れさせる。(三)内面的に導かねばならぬ。と、

ロ、鑑賞とは何ぞや

此の鑑賞なる言葉に對して理想的なる定義を下すことは出來ないと云つて居ます。音楽美學の範圍に入ると云はれてゐます。彼の世界の音楽の大家の人達が獨逸に集り、鑑賞の定義に付いて色々考へたことがあるさうです。其の時でも此の問題は遂に解決しなかつたと云はれてゐます。併し此の鑑賞なる言葉に對して、責任的に言へば言はれないこともないと言はれてゐます。即ち鑑賞とは(一)嚴密に言へば音楽を學ぶことも演奏することも聞くことも皆鑑賞に導くものである。(二)他の言では念入の研究と云ふ意味から來たものである。(三)音楽が奏せられる時、共鳴することであり、と彼は言つてゐます。要するに音楽を愛することであり、兒童が音楽を聞いてゐて其の音楽の生命と同じ氣持になることです。かく考へて見ると過去の音楽教育と將來の音楽教育は自ら判然として來るやうにありませう。

過去の音楽教育

將來の音楽教育

- 一、頭の教育
- 二、音楽の理解
- 三、外耳による聽方
- 一、心情教育
- 二、音楽の熱愛
- 三、全心全靈による聽き方

四、唱詠練習に努む

四、聽方の練習に努む

受者即ち

鑑賞→聽音練習

發表者即ち

唱詠→演奏→創作

## B 鑑賞教育の實際

以上鑑賞に付き斷片的ですがこれ位にして次ぎは鑑賞教育の實際にうつりたいと思ひます。(範圍)

イ、發聲練習：聲の明暗胸聲か頭聲か等

ロ、讀譜練習：速度を示す、輕快等、例へば兒童に此の曲はどうありますかと尋ねる。兒童が可成進んで居れば輕快とか靜かとか色々發表するでせう。指導者が「それはなぜですか」と尋ねる。兒童は「高低があるから」とか「調子が早いから」と云ふでせう。かくする事が讀譜練習に於いて鑑賞さしてゐると思ひます。尙比較、類似のもの或はそれ等の違ひを見分けることも面白くないかと思ひます。

ハ、拍子聽音：兒童に聞かして「今のは何拍子のやうにありませんか」と尋ねる。リズムが解ることは音楽に於いて必要なことは言を俟たないのであります。

ニ、音程：高低、長短強弱を批判させる。

ホ、發音体：其の發音体の形、名前、音色。

ヘ、和聲を聞きわけさせる：五、六年生には可成至難なことであります。或指導者が或學校の尋六に次の如き和聲を試みた時に、次の如き成績を現はしたと言つてゐます。

- 5. ソファレド
  - 4. シソミド
  - 3. シソミド
  - 2. トラファド
  - 1. ドソソミド
- ピアノ三回聞かせる。全兒童の半分出來る。女學校の三年生と小學校六年生とは殆ど差別なしと。是は其の指導者にして其の兒童があると思ひます。然し之によつてみると兒童でも可成伸び得る性質を持つてゐるやうにありませう。

ハ 調

右は本譜にて表示すべき所なれど印刷の都合により編者に於てその階名にて記した。縦にかいたものはその同時に奏すべき和音のそれ々の音を示す。

ト、速度、外國では速さを聞きわけさせてゐるやうにありませう。(一分間どの位を)それは脈によつて知ると云はれてゐます。即ち  $10=85$  男  $10=95$  女子：これで速さをあてさせると可成正確に行けらしいと言はれてゐます。

チ、テーマの運動をつかませる。(主題)例トーマス作曲のガボット同じ節が出たら手を挙げさせる。そんなにするの



も面白と思ひます。或は何回同じものが繰り返へされるかよく聞いてゐなさいと云つて児童に聞かせる。  
リ、其の他、傳記、範唱、レコード、音楽會、ラヂオ、繪畫等。

音楽の鑑賞に於いて是を聞かしてあげませうなどは餘興であります。之では物足りないと思ひます。即ち児童の眞に耳を傾くべき發問及び材料を考へなくてはならぬと思ひます。

(A) 發問：何回出て来るだらうかよく聞いてゐなさい。  
二回三回と主題の繰り返へされることによりコーチ形式も解つて来るかと思ひます。

○材料 (イ)リズムカルなもの

例。マーチ類(軍艦マーチ)……低學年

(ロ)ダンス……割合にリズムのはつきりしてゐるもの。

發問……例 赤坊を寝かす曲  
兵隊さん進めの曲

此の二種の曲を奏くからどちらかあてゝごらんと云う具合に聞かせる。児童が兵隊さんの曲とあてた時に、今度はもう一度他の兵隊さんの曲を奏しからと知らぬ顔して赤坊を寝かす曲を奏くのも面白いと思ひます。赤坊の曲で奏いた時に児童が、それは兵隊さん進め

の曲ですと言ふならば其の児童は鑑賞の耳としては面白くないと思ひます。

(B) これを聞いて(例へば舞踊曲)どうかかなりはせぬかと聞くのも面白いでせう……児童……先生体が動くやうですと云うならば、其の児童はよく其の氣分を捕へてゐると言はねばなりません。

(C) 曲の速いところは速やくおそい所はおそく手を打ち乍ら聞かせるのも面白いと思ひます。

(D) 暗示的にやる。例へばタランテラーは伊太利の代表的舞踊で、タランテラーとは蜘蛛の名前で毒を持つてゐる。此の蜘蛛から喰はれると死する。而し假令喰はれても汗を出せば其の死を免る。そこで此の蜘蛛に喰はれると狂氣の如くなつて汗を出す。それが何時の間にか舞踊となつてタランテラーとなる。其處で此の曲は、どう思ふですかと児童に聞く。児童は汗が出る程だから早いと答へる。それではよく聞いてゐなさいと暗示的になす事も面白と思ひます。これも一の方法でせう。

(E) 氣分感受——氣分を呑みこみます。

勇ましい、静か、美しい、ねむたいやうな、かなしい、活潑、其他……音楽的な氣分をあげさして此の中で曲を聞かし

た時にどれかにきめる。そして次第に何處が一番其の氣持がするかと、或は何でわかるかと云ふ具合に、おして行つて最後に場面の想像に向ふことも一の方法かとも思ひます。

鑑賞教育に於てレコードを鑑賞させることが鑑賞であり、レコードを鑑賞させなければ鑑賞教育でないと思へば其の鑑賞は實に範圍の狭きものと言はなければならぬのであります。レコード以外に尙鑑賞させることの數多きことを忘れてはならないと思ひます。

附 山本先生、井上武先生の授業參觀中より

教材 村のカチ屋 山本先生

一、音程練習

二、發聲練習

(問) 今までは下第一線を「ド」としましたが、今日は第二線を「ド」とします。下二線を「ド」とする時は#をつける。此のしるしで歌ふ練習を、いたしませう。として

(イ)  $\text{ドレミファソラシ}$

此の練習をなし……これは何のしるしですかと尋ねて其の指導をなす。

(イ)  $\text{ドレミファソラシ}$

$\text{3 5 5 5 | 1 3 3 3 | 2 5 6 5 | 1 2 3 0}$

$\text{3 5 5 5 | 1 3 3 3 | 2 - 3 1 | 2 2 3 1 0}$  fine

$\text{7 7 1 2 7 | 1 1 2 3 1 | 5 3 5 3 | 2 1 2 3 2 0}$

(問) 何のしるしか尋ねて指導す。

附表上に初めより一小節づゝ書きながら児童に音程をつけさせながら讀ます。

(一) つぎに、同じもの  $\text{3 5 5 5 | 1 3 3 3}$  これが何回出て来るかよく聞いて下さい。

兒……三度と答へる。

次に指導者ピアノを奏く、レドレミレ、レドレミド符ではどこですかと尋ねる。

(二) 次に指導者板書(四拍子のタクト法の圖をかく)。

(問) きちんと手にてやりなさい。かどがするやうに……最初の四拍子の指導……此の間に知つてゐる児童は歌ひ指導者は拍子を、とらせながら伴奏す。

三、歌詞提出

イ、児童に讀ます……其の間に六ヶ敷しいわけを聞く。児童質問いつこく……指導者の思つたことを何處まで



もやる。其他。

ロ、指名讀

ハ、齊唱：起立して

四、指導者(問)

イ、皆さんカチ屋を見たことがありますか兒童：レコー  
ドでやつてみやうと思ふがわかるですか。どんなに音  
を出すかねー兒童：とんてんかんかん。

指導者(問) とんてんかんとなつたら手を舉げてごらん。

五、森のカチ屋のレコード鑑賞

六、既習教材提出「初夏の夜」

七、ピアノによるカッコウ鳥の鑑賞

(問) カッコウ鳥が幾度鳴くか聞いておなさいよ。最後に何  
回か兒童に尋ねる。

聽音による聽唱法の授業

井上武先生

一、發聲練習

二、音階練習

(問) ピアノを奏きながら此の音は何と云ふ音ですか。ド

ミソドを聞かせる。兒童ドミソドと答へる。こんな

具合に……

三、新教材：では今日の唱歌にゆきませう。

歌詞提出

イ、讀ませる

ロ、わけの質問を聞く

A B

キンヤギンニカガヤイテ

C D

ソララメガケテフキアガルフンスキノミズ

F G

バット大キクヒロガレバイケノヒゴヒガチヨットハネタ

四、指導者先づ歌つてみせる

發問イ、先生がどこで息をしたか聞いてごらん……一段毎

になす。兒童……答へる。

ロ、今度はどの音と、どの音をのびしたかよく聞いて

おなさい、伸ばしてゐる歌詞に兒童を出して○を

つけさせる……之も面白ひと思ひます。

Aはキ、キ。Bはカ、テ。Cはソ、メ。Dはフ、ル。

Eはフ、ノ、ズ。Fはバ、オ、ヒ、パ。Gは、イ、チ、

タ……勿論指導者が歌つて聞かせる。

五、(問) 噴水の水を歌つて「ズ」は幾つ伸ばしましたか。

指導者此の時、手で拍子をとる。

六、(問) ピアノを奏くから聞いておなさい。

七、(問) 今度は一處に歌ひませう。中々うまく出来るとほ

める。

八、(問) 先生が手で拍子をとるから半分の方は立つて歌つ

て下さい。残半分は其の間違を聞いて下さい——後、指

導者間違を矯す。次ぎ半分を歌はせる……前と同じ。

九、(問) ピアノを、どこかわからないが奏くから聞いてお

なさいよ。指導者フキアゲルを二回奏く。兒童二回と答

へる。

バット大キク 兒童 バット大キクと答へる

池のひごひが 兒童

十、(問) 先生は今日は皆に教へなかつたが、よくおぼえた

ね。

十一、齊唱をなす

十二、今日の題は何かね。兒童、フンスキの水。指導者、そ

れはなぜ噴水の水と附けますか。兒童、水の噴き上ぐる

のを歌つてゐるから……

指導者、題はキンヤギンニの歌ではないですよ……

此の場合兒童はよく歌曲の初めの歌詞を、とつて題とする

ことがあるやうにあります。例へば荒城の月で言ふならば、

先生、今日は春高樓ですかと、よく聞かれます。そして恰  
も題を春高樓の如く間違つてゐるのは我々の注意すべきこと  
と思ひます。

以上鑑賞教育の實際に付いて述べましたが甚だ抽象的で御  
不満な點が多々あることと思ひます。併しこれが斯道に對し  
て聊かの御参考になる點がありますならば、幸甚の至りと存  
じます。

### 南海部郡中部

目次

一、鑑賞の意義 二、鑑賞指導の必要

三、鑑賞指導の段階 四、鑑賞指導の實際

五、結 論

### 一、鑑賞の意義

鑑賞力の進んだ者にありては、音楽そのものの中に融け込  
んで一体となり、音楽の三昧境に到達し、全く無我の状態に  
立到る事が出来るのであつて、この境地に没入する事の出来  
る者が最も進んだ鑑賞力を持つた者といふ事が出来る。



## 二、鑑賞指導の必要

鑑賞力を持つ人々によつて育て上げられた音楽は、實に眞の音楽であり、極めて高尚な音楽である。しかし眞の音楽の發達によりて眞に音楽の進展があり、文化の建設に寄與し吾々の人格を向上せしめる事が出来るのである。現今に於ける音楽の發達が、音楽家のみの働きではなくして、之を保護し之を奨励した一般民衆の力が加はり、よりよい物を要求して來た鑑賞家の努力が加はつてゐる事を見逃がすわけに行かぬのである。この間の消息を覗つても鑑賞家の任務の偉大さが判り、一般民衆に鑑賞力を持つた者が多ければ多いだけ音楽が正しき發達を遂げ得る事がわかるのである。即ち音楽の發達と民衆の態度は極めて緊密の關係にあると云ふ事が出来るのである。然るに現今の大部分の民衆は瞬間の快樂にあこがれて永遠の生命を把握せんとせずして、徒らに低級なる音楽の跳梁にまかせ、野卑なる音楽の流行に冷然たるものがある。しかしてかゝる状態にありて高尚なる音楽の隆盛を迎へんとせず、しかも流行より流行に走りて應接にいとまなきを以て得々としてゐるのである。かくの如き音楽的に低級なる趣味を有する民衆によりて培はれる音楽に生命の躍動もな

く、神の聲の聞えないのは勿論である。我等はこれ等の狀勢に決して冷然であつてはならない。むしろ進んで眞の音楽の發展におしまず一臂の力をかさなければならぬのである。天才が立派なる音楽を作り出さんが爲、貧困を忍び世の冷淡に甘んじ、過勞をも意とせずして創造されたる光輝ある音楽藝術を擁護し、永遠に盡きない喜びの泉を掘はんが爲に、我等は進んで多少の勞をとるべき義務がありはせぬだらうか。しかし出來得べくんば更に一步を進めて我が國に於ける音楽の進むべき方向を明示し決定すべき大事業にも參與すべきではないだらうか。其内容の街頭音楽を奨励し、深遠なる感情を宿し、高尚なる美の觀念を體現してゐる音楽を冷遇する様な事は決して眞の發達に力を致したとは言へないのである。あくまで純正なる音楽の發達に力をつくさねばならないのである。しかし此の如き仕事は鑑賞力を持つた者のなし得る事である。我々は少しでも多く鑑賞力を持つた人々を作り上げる可く努力しなければならぬ。即ち一般民衆の内、音楽的に救はれる者は別として、鑑賞力の向上を望み得る者にありては、努めて之を正しい方向にむけ、耳を開き心を開きて眞に音楽を聞き取り得る能力を涵養せしめ、頹廢的ならざる眞の音楽の發達に力をつくすべく心掛けしむる事こそ指導者

の重大なる使命といはねばならない。新興日本の音楽藝術の爲め再考すべき重大事ではなくてはならない。

## 三、鑑賞指導の段階

鑑賞力を持つ事は萬人に是非共望みたい所であるが、急に出来るものでもなく漸を追ひて向上させて行かねばならぬ事はすべての藝術に共通する事であつて、特に音楽に於ては最初より強ひても決して目的を達する事は出來ぬものである。されば我々は我々の指導しつゝある兒童に鑑賞力を有するに到る第一階程より指導を始めなければならぬ。こゝに於て我々は音楽の本質の研究をなしてその進む可き方向を明示しなければならぬ。元來音楽が我々に訴へる訴へ方には種々あるが、まづ次の三つの訴へ方について研究を進めて行きたいと思ふ。勿論これは比較的重要で又最も普通の訴へであると思ふ。

### 一、感覺的訴へ

感覺的訴へとは音楽が我々の聽覺に與へる訴へで、まづ第一の訴へ方である。脂氣のない音、龜裂のいつた聲よりも明朗なる響き圓味あるふつくらとした熱した聲が、どれだけ我々の聽覺を満足せしめるかは明白で、同一旋律でも歌ふ聲奏

する樂器によりその與ふる喜びには非常に懸隔がある事は誰しも肯定することである。しかしこれは心意にも感情にも及ぼされず、單に聽覺に對して加へられたる訴へであるのみである。即ち一般動物に共通なる最も單純なものといふ事が出来る。

### 二、審美的訴へ（睿智的訴へ）

或る場合、粗末なる樂器、貧弱なる聲で奏せられる旋律が異常に我等の心を捕へて強烈なる感動を與へる事がある。この場合感覺的訴へ方をするものは殆んどないのであるにも拘らず、聽者に満足と與へる事は事實である。であるとすると、この訴へ方は前の感覺的訴へより異なるものでなければならぬ。この魅力は形の美であり、そしてこれが我々の心に訴へるものである。我々は感覺によりて音の感覺を聯結し、一定の形態を有する旋律とした上でその美を正しく感受する心意の働き即ち睿智の助けをかりたもので、我々は聞くものゝ姿を知覺したのである。この満足を得る價值を審美的價值又は美的價值と稱するから、この訴へ方を審美的訴へ方、即ち睿智的訴へ方といひ、最も大切なものである。この美がなかつたならば音楽は決して表現的たる事を得ないのである。

### 一、情緒的訴へ方



情緒的訴へ方は感情的訴へである。即ち音楽が我々に色々な感情を起させる力の作用である。喜悅の感情、悲哀の感情を起さしめ、平靜なる感情を飛躍的な衝動、哀傷の気分の中に陥らしめる訴へ方である。繪畫彫刻の暗示する感情を客觀的表現といふに對して、音楽は我々に直接に働きかける主觀的昂奮といふ。我々がいかに平靜を力めやうとしても、華やかな圓舞曲陽氣なマーチは我が耳を誘惑して、共に歩み共に踊らうとする衝動が切りに頭を擡げる。そして實際の舞踏實際の行進と殆んど同じ様に昂揚の感勇壯の情を抱かせるものである。音楽のこの情緒的價値は極めて大切なものであつて、之によりて我々は最も内奥なる感情胸の秘奥に宿る最も隠秘なる情緒を表出する事が出来、「音楽は情緒の言葉なり」といふ事が口にされるのである。しかしながらこの表現價値も實際は大部分音楽の形式による事が多いのである。

こゝに於て我々が音楽の本質を知り、その訴へ方を知つたので、我等にはこの訴へ方を受け入れる鑑賞が行はなければならない。言ふまでもなく、この音楽の示す迫力を十分生かして、全身的活動を傾注して作品そのものの中にとけ込んで、全く同一の流れとなつて無我の状態になりうる事が出来ねばならないのである。即ち、次の段階によりて我々は鑑賞

力を増して行くやうにしなければならぬのである。即ち

一、感覺による享樂

音により快感を感じる。

一、理智による理解

形式を知りてその形式美を味ふ。

一、感情による昂奮

音楽の具現する精緻なる思想感情を受け入れて完全なる融合をなす。

#### 四、鑑賞指導の實際

一、指導上の留意點

前にも述べたやうに、一度に最後のなまでの到達する事は不可能であり、又到底至難な部類の人々もあつて、全部が全部十分なる鑑賞力を持つ事は出来難いものであるから、我々は力めてかゝる人々を少しでも多く導いて高尚なる音楽的な趣味を持つ様にしなければならぬ。徒らに低學年の幼稚なる兒童に各曲の持つ迫力を感じしめ様としても、これは到底六つかしく又効果の少いものであるから、我々は享樂より鑑賞への道程をたどつて、漸々に神秘の扉を開かする様指導したいものである。でこの鑑賞力を進めるにあつて、最も

注意しなければならない事はその態度である。一言にして盡せばその態度たるや誠實であらねばならない。誠實は何事にも缺く可からざるものであるが、特にこの音楽に對した時誠意が缺けたならば到底その目的を達する事は出来ない。誠實の態度こそ鑑賞力を進める唯一のものであり、自己の魂への尊い奉仕である。この故に低學年にて築かれたる學習態度

は、生涯に於ける音楽的趣味を左右するといふも過言ではないかも知れぬ。指導者が兒童の好奇心にのみ投ぜんとする事は非常なる誤りであり、徒らに兒童に迎合する事は音楽を冒瀆するものであつて、正しく純な音楽愛好者に導いて行く事は出来ない。我々は常に指導者の立場を忘れてはならないのである。

#### 二、鑑賞指導の材料

鑑賞力をつける事は最終の目的であり、この目的に到達せしむる爲めに手段方法が生れて来る。左に主なる材料をあげて見る。

##### 1、自然の音

自然は實に微妙なるもので、小川のせゝらぎ、木の葉のさゝやきにも我々を魅了し去るものが多い。自然の音を聞いて快感を感じ共に唱ひ共に踊るだけの

心の餘裕を持つ様に導くことは、音楽鑑賞の第一歩

ともいふべきものである。

##### 2、兒童の唱奏

子供に最も近いものは子供である。兒童の唱奏が兒童にとつて最も印象深く、感激強く、興味深いものである。

##### 3、自己唱奏

人に聞かせるのでなく、自己の心より迸り出でたる全靈的活動である。心意感情の働きについて、正しく指導され居る事は大切な事である。

##### 4、教師の唱奏

非常に効果の上るものであるが、教師その人を得ない場合も可成りある。指導者は常に修養を怠らぬ様努力すべきである。

##### 5、専門家の唱奏

眞面目なる人、音楽に全靈をなげうつて精進してゐる人が理想であり、これが音楽鑑賞の力をつける有力な方法の一つである。但しこれには經費の問題とその人を得る事に問題があり、至難の部である。

##### 6、蓄音機のレコード



少しの費用で大きい効果をあげ得る。即ち名曲といふ名曲を専門家の唱奏を、そして全國世界の音楽に亘る事も可能である。反復も出来れば難易によりて按配する事も出来得て、鑑賞力の指導にはもつて来いのものである血の氣が少々うせてゐるとも考へられる。

#### 7、ラヂオ

文明の利器の一つで活用すれば相當の効果のあがるものである。

#### 三、鑑賞の方法

一律に一齐にやる事はよくないが現今の制度ではやむを得ぬ。己むなく効果的な方法をとる事が必要である。即ちさなきだに少い音楽の時間であるから、十分取る事は出来ないが特に鑑賞の時間を設ける必要は大いにあると思ふ。そして歌謡の教授等の時間を利用する事は常に考へられなければならぬ。教授時間にかぎらず機に臨んでの指導等は十分心掛くべきで、機会をつかむ事は努力少く効果多き指導である。左に各學年毎の指導要點を列記して見る。

#### 1、低學年

一、兒童の知れるもの、既習のもの、唱奏による快

#### 感の練習。

一、リズムカルなもの、マーチ、ワルツ等の單純なるものやさしいものによる身体的表現をなさしむ。

一、種々なる音を聞かしてみせしめる。

一、純音楽の初歩として寫實的な單純なものを撰ぶ

一、態度は全學年を通じて注意を怠らず、常に誠實ならしむ。

#### 2、中學年

一、鑑賞歌曲は常に教材とよく連絡をとる。

一、重音を味はしめる。

一、聴き方の工夫。

一、國民的情緒の啓蒙。

一、レコードによる鑑賞を多くする。

一、純音楽の程度を高める。

#### 3、高學年

一、名曲を聞かせる。その解説も相當に。

一、各國民性を現はすに足る代表的な各國民謡を。

一、聴力記憶力の練習。

一、舞踏曲の聞きわけ。

#### 一、各國々歌

#### 五、結論

要するに鑑賞力をもつた人間を多くする事は正しき音楽の發達を促し、人類への貢獻偉大なるものがある。しかも鑑賞力のあるもの、多少は實に指導者その人の重大なる責務であるといはねばならぬ。小學校に於ては白紙の兒童をそれ／＼の天分によりて培ひ導き、正しき音楽を理解する力、それを享樂する態度を十分持つ様にしなければならぬ。それにはあくまで指導者の修養が必要であり、その方法手段の研究が必要になつてくるのである。吾々は今後共お互に益々精進をつゞけて行かねばならないと考へるのである。

#### 日 田 郡

#### 目 次

- 一、鑑賞の目的及び必要
- 二、兒童の傾向
- 三、鑑賞指導方法の原理
- 四、鑑賞の機會
- 五、系統案について
- 六、實際指導の方法
- 七、鑑賞の資料
- 八、鑑賞指導の注意

#### 九、鑑賞の態度

#### 一〇、結 び

#### 一、鑑賞の目的及び必要

#### ◇教育的要求から

唱歌教授に於て唱謡と鑑賞とは二大要素である。能く聴くものはよく歌ふで感情と技巧が確實に受容されて始めて兒童自身の人格を陶冶し、藝術に對する深い理解を與へることが出来ると思ふ。

#### ◇社會的要求から

近頃社會音楽が盛になり、種々な機關を通じて社會音楽に接する機會が多くなつて來た。然しこの社會音楽は健全なものばかりとは限つてゐない。中には子供の純良さを損ひ俗惡な趣味に引き入れるものが尠くない。萬一子供がこれ等の音楽に禍されるとすれば、それは子供が眞に音楽に對する正しい批判力がないからである。近頃喧しく叫ばれてゐる流行歌の問題にしても音楽を聴く、耳の訓練が出来てゐれば低級なものは歌はなくなる、學校ではこれ等に對する適切な指導をなし、更に高い鑑識を教養せねばならぬ。従つて我が國文化向上の方面からみても、又個人的人格陶冶の上から云つても、鑑賞教育は缺ぐべからざるもの、一



つである。

## 二、兒童の傾向

- 1、注意の集注が出来ない。
- 2、樂曲を部分的に分解して味ふ。
- 3、好悪の感をもつて聴く妄評して良否をきめる即ち主觀的に味ふ。

## 三、鑑賞指導方法の原理

このやうな傾向をもつ兒童に對しては

- 1、諦聽的態度の養成をなすこと  
つまり如何にして注意を喚起し、それを持續さすかと云ふことの立案によつて兒童を導くことが指導方法の最初の原理である。
- 2、鑑識法の養成をなすこと。
- 3、度々聴かすこと。

## 四、鑑賞の機會

- 1、音樂會、兒童學藝會
- 2、樂器の演奏、ラヂオ放送、蓄音器

づ對象たる兒童を充分知らなくてはならない。先づ

- 1、唱歌に對する知識と感受性とを養成して音樂美を味はせる。
- 2、歌へなくとも聴く耳を養ひ、生理的缺陷のあるものなど特に力を入れ度い。
- 3、曲節の吟味判斷  
●面白いか——悲しいか——勇しいか。  
●何れの部分が面白いか。
- 4、聲音の醜醜發想の巧拙等を批判させる。

(批評判斷には同情と愛をもつて)

◆一單元の授業の實際的立場から

▲如何なる場合にその取扱ひをなすべきか。

- 1、教授から練習に入る中間或は練習の終の段に。
- 2、兒童の心身に倦怠を覺えて來た時、特に發聲器官の疲勞した時。

▲一つの曲を鑑賞させる場合

- 1、先づ諦聽指導をなし即ちその事によつて注意を集注させる。
- 2、次に鑑識方面に之を展開させる。

例へば低學年であれば寫實的な音樂を其の事件の進

## 3、普通唱歌時間中

- イ、教師の範唱範奏
- ロ、兒童相互の唱謠
- ハ、蓄音器の利用

## 五、系統案について

◆低學年

先づ彼等の生活に適するリズム的のものを與へ注意の喚起を促し、尙その持續の訓練をなすことが必要である。

◆中學年

大体に於て低學年でふんだ系統をついで擴張し更にメロデーの鑑賞を中心として行ふ。

◆高學年

ハーモニーの美しきものなど所謂純粹音樂的のものを度々與へて鑑賞させる。

## 六、實際指導の方法

實際の方法は演奏會教師などによるもの即ち人に依るものと蓄音器、ラヂオ等に依るものとの大体二通りある、つまり如何にしてその取扱ひをなすかの問題に先立つて指導者は先

行につれて起つて來る一つ々の事柄についてもることなく識別させる。

高學年では

メロデーの美、ハーモニーの美、其他聲音の美等に至るまでその點を鑑識さす事が必要である。こうした部分的なものが完全に鑑識されるやうになつた上更に、  
3、度々聴かせたなら漸次全曲の氣持へと進むことが出来るのである。

## 七、鑑賞の資料

唱謠教材全部を鑑賞の資料と考へて居る。

用意すべき資料(特に機械による鑑賞資料)：レコード

### 1、音色の上から

人聲：男子の聲、女子の聲、合唱

樂器：ピアノ、ヴァイオリン、其他。

### 2、器樂の上から

ピアノ曲、子供によくわかるもの、有名な作品

ヴァイオリン、同前。

### 3、形の上から



マーチ、散歩マーチ、軍隊マーチ  
舞踊曲の有名なもの、ソナチネ

4、國際上から

各國々歌、但し有名な國のもの、各國民謡

5、日本の代表的の作品——日本大家の唱奏

世界の代表的の作品——世界的大家の唱奏。

6、昔から有名な曲で常に子供の話題にのぼるやうな曲  
但しレコードを使用する場合はレコードの善悪並に  
適否を十分に研究しなければならぬ。尙教授せる教  
材曲との聯絡が大切である。

### 八、鑑賞指導の注意

1、聴き方の訓練をなすと同時に一通り音楽上の知識を  
與へる。

種類、樂器による奏法、其他。

2、理解に役立つ説明をなす。

3、全曲の氣分を把握せしむ。

リズム、テーマ

華かな氣分、沈んだ部分

斷片的に陥り易い。

4、體驗的聴き方

概念的にきく癖がある。

何か意味づけやうとする癖がある。

### 九、鑑賞の態度

教師

1、自らも鑑賞し發表して鑑賞の態度と向上させたい。

2、説明は必要な點のみで兒童には強いて感想發表及び  
批評はさせない。

兒童

1、樂な姿勢。

2、兒童の自然の表情は尊い。

3、兒童相互の唱謡には同情と愛をもたせたい。

### 一〇、結 び

要するに教師は熱誠なる趣味と努力とに依つて音楽に對す  
る教養をなし兒童をして、自らあらゆる鑑賞の機會を捉へし  
め、樂曲の精髓を感受せしめ音楽趣味の向上發達をはかるや  
うに指導せねばならぬ。

## 第十七章 基本練習

### 速見郡第四部

目次

一、基本練習の意義

二、從來の基本練習

三、低學年兒童の基本練習

#### 一、基本練習の意義

一般に言はれてゐるところの唱歌科の基本指導とは如何なる  
ものであるかを最初に當つて明瞭にして置きたいと思ふ。  
問題は「基本」なる二字と之に對應する唱歌科の本格的な任  
務、本質的な唱謡、鑑賞指導との關係、及びそれ自體の内容  
は如何なるものであるかの二つになるのであらう。

今、後者より前者への方向を探りつゝ要約して述べるなら  
ば、通常云はれて居る所の基本指導とは、發音、發聲、呼吸、  
聽音、音階、音程、拍子、發想、讀譜、指導等を、指示する

ものであつて、之等は廣く音楽を構成的に吟味して、それら  
の中より共通的な基本形、素材等の要素を抽出してみたもの  
であつて、眞の音楽學習を助長し音楽の眞髓を体得せしむる  
爲の過程に於て必要な肥料を與へるものであつて、基本練  
習の教育的價値も亦こゝに存するわけである。即ち、それ自  
體目的價値を持たない音楽教育に對しては實に重要な手段的  
價値を有するものである。

#### 二、從來の基本練習

從來行はれた基本練習は、それが唱歌科の如何なる部位を  
占むべきものであるか、如何なる使命を持つて居るものか、  
何故行ふものか、特に又何々を行ふのか等、基本練習指導に對  
する根本的な知識が確認されて居ず眞摯なる研究を缺いて唯  
單に何か知ら人がやるから自分もやる。一寸入れて見ないと  
唱歌の授業の様な感じがしない。又やる事が無くなつて來る  
等と言つた様な考で、極めて御役目式に教授の形式を整へる  
ためや、時間の餘りを充足する爲に等、多くもない教授時間



中の貴重な時間を徒費して居る傾向があつた。甚しきは一部の樂天家、乃至は感覺的な享樂主義者の如き、基本練習を邪魔物視して全然行つて居なかつたものである。特に低學年に於ける本科の授業に於て上述の感が深かつた。即ち低學年に於てはそんなに堅苦しい事はやらなくてもよい。そんな事をやるから唱歌をきらひにさせ、實績も上らないのだ等と言つて全然やらないものと、行はれても餘りに程度の高い方法でやつて居た様に思はれる。低學年に於ては、そんなに困難であるのか、又そんなに程度の高い事をやらそばならないのか、或は又全然不必要なのであらうか。以下私は特に低學年兒童と基本練習とについて流べてみたいと思ふ。

### 三、低學年兒童と基本練習

幼い兒童達が他愛も無く無邪氣に歌つてはねて居るのを見る時は、誰しも彼等の純真な心情をうらやみ、同時にあまりにもかたにとらはれ勝ちの大人の考へ方を卑下するのであらう。併し我々は次に述べる如き言葉に對しては細心の注意を拂ふべきである。即ち、兒童は右にも述べた如く純真で無邪氣に快活に嬉戲するものである。兒童の生活は遊戯が殆ど其の全部を占めてゐる。兒童は唯その遊戯の中に於て成長

を遂げて行くものであつて、唱歌の如きにしても、極自然のままに兒童の要求し歌はんとする唱歌を彼等の唱誦本能のまに／＼歌はせておけばそれでよいのである。徒に苦んで基本練習だの何だのと言つて無味乾燥な、ア、エ、イ、オ、ウを鸚鵡返しに唱へさせてみたり、ド、レ、ミ、ミ、レ、ド、イ等機械的にやる必要はない。と言ふ一部の人の言葉である。

此等の人は兒童の本能的な生活の中に理想への思慕心を見出して、そこに彼等の自ら伸びんとする原動力を求めていたつたものと考へたいが、それらの人の歩み來つた過去の事實は、ともすれば皮相的な兒童觀に基づき、單にその自然性の一面のみ觀察着眼して、誤つた解釋に於ける自由教育の如き姿態をとつた、殆ど放任に近いものであつて、徹底して前述の考へ方によるものとは考へられない。此處に於てか、私は、低學年に於ける基本指導のあらゆる問題の解決の鍵は教師その人にあることを絶叫したいものである。

右の爲には先づ現在生活しつゝある具体的な兒童を正しく研究して、その精神活動の真相を把握し、一方又基本指導そのものを充分に考察して其の何たるかを明確に認識することである。扱て現實人としての兒童の生活を眺むるに、それは極めて具体的である。而してその具体的なる生活想の一面とし

て常に現實的な満足に甘んじやうとする一面と、純粹なるものを要求する。理想への思慕心の萌芽的なひらめきの一面とをみる事が出来る。而して現實的な享樂にふけらうとする一面は非常に強度のものであつて、純粹なるものを求めてやまない。と言ふ一面は極弱い稀薄なものである。之が爲に後者は常に前者に蔽はれ勝である。蔽はれ勝になることはあつても理想への思慕心の萌芽的なひらめきの存することは事實に於て疑ふ餘地がないのである。この一面を今彼等の音楽生活——唱誦生活——の中にもとめてみるならば、それは歌ひ得ぬ不満であり、又歌ひ得る満足であり、喜悅であらねばならぬ。兒童はよく、否定的な形で色々の事を訴へる事があるが、唱歌に於ける「一人で歌ふのはいや」「樂譜を読むのはすかない」等の言葉は何を意味するか。彼等のこの言葉は歌ひ得ぬ。讀み得ぬ不満の表出である。勿論歌ひ得ぬ不満は同時に、よりよき唱誦を希求する心意を持ち得るものである。「讀めたら讀みたい。」であり、「歌へたら一人で歌ひ度い」のである。一切の唱誦技術を缺除して「歌を歌ふ」と言ふことは考へられない。「立派に歌へたらいいな——どうしたらきれいに歌へるか知ら……」とは兒童が常に持つ所の歌ひ得る満足と喜悅が必然的に要求するもので之は即ち彼等の理想思慕心の

ひらめきに外ならない。此處に於てか、獨り唱歌科のみに止らず兒童は基本的な練習は之を根本的には認容して居るものである事が分る。故に教育の充全なる姿態に於てはあらゆる基本的指導は當然爲さるべきものである。次に所謂、基本練習なるもの、内容を眺むるに、それは既に述べき如く具体的な音楽から抽象された音楽の要素である。けれ共この抽象は我々の研究の爲の便宜なもので、之が指導の實際に當つては、當然兒童の具体的な生活の内容にふさはしい姿で提示さるべきであつて、指導者の意識内に於ては抽象的な基本要素を自覺して居ることは必要であるが、被指導者に於ては、發聲練習でもなく、發想練習でもない。唯具体的な生活其のものである。然るに、これを抽象的な基本要素のまま、具体的な兒童の生活へぶつつけに行つて果して兒童は受取るであらうか。其の無理な事は餘りにも明瞭である。所が従来の基本指導に於ては、此の抽象的な基本要素を殆ど其の姿のまま、兒童に與へられた觀がある。此處に従来の基本指導の失敗と不徹底があつたわけである。低學年兒童を對象として考察を進めてゐる我々は、どこまでも兒童の具体的な生活——唱誦生活に——の中基本指導を發見すると言ふ態度を根本的に持つことが必要である。上述の如き見解の上に立つ基本指導の具



体的方案は如何と云ふに、それは當然指導者及び兒童の異なるに随つてそれ／＼少しづつは姿態に差異の起ることを豫想すべき、一律に決定さるべきものではないと思ふ。

## 下毛郡平坦部

### 目次

- 一、基本練習観
- 二、基本練習の種類

### 一、基本練習観

唱歌教授に基本練習の大切なことは、建築事業に基礎工事の緊要なるに等しいものである。そして築造物の種類性質によつて基礎工事の仕方の異なるやうに、唱歌の程度如何によつて基本練習の標準とする所も自づから違はなくてはならぬ。然るに従來行はれて居た基本練習は、唱歌教材と如何なる關係に於て行はるべきあるか、子供の唱誦能力と如何なる交渉を保つべきであるか、唱歌教授の如何なる地位に置かるべきであるか、斯かる明確なる研究の結果に於て行はれたのである。『斯ういくのが指導順序として理論的で授業の型が整

### 二、基本練習の種類

基本練習は、音聲そのものは勿論、調子と拍子と節奏とが

含んで居るから、その實際練習に於ては、呼吸、發聲、發音、音階、音程、拍子、節奏、聽音等に涉らねばならぬ。之等の諸練習は各個に就いても系統的に行はねばならないのは勿論、相互に於ても各々聯絡して有機的に練習せねばならぬ。即ち縦の系統と横の系統とが有機的に統一されることを要する。然らざれば、個々獨立した練習のみにしては實際に役立たないからである。次に各個の練習に就いて述べやう。

### 發聲

よく聽かせようとする一つの方便として弱聲發聲法をあげる事が出来る。と言ふのは、自分の聲音を聞きながら歌ふと言ふ態度及び訓練はたしかに聽かせる事の一步にもなると思ふし、聽き乍ら歌ふには微弱發聲が都合がよいと考へられるからである。

又聽かせると言ふ事と離しても、弱聲で歌はせる事には次の様な利點がある事を認める。

- 1、比較的長く繼續して歌つても發聲器官に及ぼす害が少いこと。
  - 2、高音も樂に出し得る事。
  - 3、變聲期を無難に通過する事。
- たと然し何時までも、微唱一點張で進まねばならぬ理由は

然とする。」との事で徒らに科學的に論理をのみ整る事に苦心してゐただけではあるまいか。私がいつか、兒童に唱歌科の好惡を別けさせて、嫌な者の理由を聞くと、「面白くない基本練習をくどくどとやらせられて唱歌を歌ふ時間が少いから」と云ふのが大部分であつた。果して之は何を物語るか、言ふまでもなく、基本練習はよりよく唱誦せしむる爲の準備であるから、必ずそれが唱ふ事に關係づいてをり、基本練習する事によつて唱誦がより高次なものへ進んでゐなければならぬ。勿論歌曲の各共通する形をとつて之を一の基本練習としての練習は、やがて間接的に唱誦へ効果を求めんとするものであるが、然しながら従來の如く餘りに分析して専門化したる基本練習は、小學校の唱歌教授上徒らに時間と努力のみ大にしてさほどの効果のないものである。

吾人はいつもその指導の根本を教育對象たる兒童の唱誦力の實際に置き、その唱誦に即しての基本陶冶に着意し、専門的、分析的に流れず歌曲と綜合された基本練習に努力しなればならぬ。

ないと思ふ。種々の基本練習殊に發聲練習が進むに従つて、美しくそしてかなりの聲量が出るやうになつて來た時も、強ひて弱聲で歌はせる必要はないと思ふ。又たとへ、聲音の訓練が充分についてゐない兒童でも、この時の環境により兒童の心が「歌なくんばあらず」と云ふやうな状態に達した時などは無理にならぬ程度で、力のこもつた聲で、曲と心の高調した部分を歌はせてよいと思ふ。むしろ日々の授業に一回位はこんな歌ひ方をする事が必要でないかと思ふ。

### 發音練習

この練習は頗る單調であり、且つ無趣味であるから、従來練習の様に頑是ない兒童を口形圖の前に引き据へて、アエイオウの口形を強制して居たのでは兒童には如何なる感興もわかず厭がらせるのみである。力めて興味と變化とを與へる様各音を種々に組合せ、或は名詞とし、或は語句とし、之に種々なる高度を附して行へば妙である。

### 音程・音階

唱歌に於て音階音階發聲が充分習得し得られるなら、その唱歌は充分と言へるであらう。然るに此の重大使命を持つ三者こそ、その指導法に依りて誠に無趣味、且唱歌に飽かしむる最大原因となるものでなからうか。特に低學年に於ては然



り。こゝに興味を中心とせる、又児童の生活に即したる、動物の鳴聲を模倣し、低音に於ては、モウ(牛)・リン(犬)・カア(鳥)等高音に於て、チュ(雀)・ピヨ(ひよこ)・チュウ(鼠)等及び大鼓(低)のドン・ラツバの(高)タタタ鐘のカン等を一度二度三度位にて移調して授く、尙母音・子音等その練習の目的を達成すべく、適宜指導者に於て構成し、或は教材と連絡して三者綜合の練習を行ふ。

中・高學年に於ての指導

#### 1、音階圖に依る音の高低練習

最初は音階圖の指唱法によつて練習するも音階圖を對象して學習し居る中は眞に理解せりと思推されない點もあり、聽覺に訴へて明確に認識し得るまでに徹底せしめる。

#### 2、本譜練習帳作成

階名にて稱へしめし後、適當の言葉と共に作り之に附して歌はしむ。児童の實生活と關連したる児童の作品を取入る。

音程音階練習は機械的なる切り離されたる、無味乾燥なる扱ひはさくべきである。

#### 聽音練習

#### 1、音色の諦聽

能動的に把握し得た音を、更に自己の持つ音色即ち聲音として發表することから始め、進んで音色そのもの、特質を聞きわける事に至つて音色の美を感じ得る。教師の聲を明確に捕へる練習を冒頭として、教師の聲音を兒童の聲音として、出す事の練習、蓄音器レコードの獨唱の兒童聲音化、オルガンの兒童聲音化、各樂器の兒童聲音化を進展せしめる事が、音色の美を感じしめる唯一の基礎であると思ふ。

#### 2、長短の諦聽

二音の比較に始まり、律動と關聯せしめ、唱ひ、手で拍子を取り、足踏をして明確に捕へさす。本譜中の音符と連絡して視覺に訴へて、然し主を聽覺に置いて、タクトに依り、訓練してゆく。

#### 3、高低の諦聽

二音の差を判然と聞きわける兒童に、何れが高いの名稱を知らぬ兒童がある。故に一音を發聲せしめ、次に異音を發聲せしめ、二者の差を明確に感知せしめた後に二音の高低と言ふ語義を教へる。必ず二音を示して比較判斷せしめ語義を明確に把握せしめる。始めは兒童の聲に始め、次に教師の聲、器音の判斷をせしむ可きである。

次に一音を板書し、上位に高音、下位に低音を記載して高低音の記譜を知らしめ、猶記譜音を發聲せしむ。

更に上下の間隔に依り二音の高低の差がある事をも知らしむ。

#### 4、和聲の諦聽

音楽に於ける最も高次の地位にある和聲に就いては、特別な指導を要する故、兒童の音樂生活に於ては、積極的指導形式としては、高學年に於てし、低學年に於ては、調和共鳴する樂器合奏、及び伴奏を多く聞かせ協和音の中に生活せしめる事である。此の無言の指導の下に和聲の美を兒童に明確に把握し得る。此が進展して始めて高學年に於いて合唱が可能である。

#### 拍子練習

#### 1、強弱の認識

樂曲の進行に於て、強勢と弱勢とが種々なる組合せの形で反復されるものであることを考へさせ、兒童の歌ふ曲、行進曲その他の樂曲美を諦聽して、識別せしめるのである。

最初は二拍子と三拍子に限り、四拍子及六拍子は學年の進むに従つて加へる。兒童の識別の結果を身体的動作に表出せしめて批評する。

次に強弱の具象化、即ち○・○・○の類による。之を歌詞と連絡對照して、リズムカルに唱はせる様に導く、この形象を見て、主觀的リズム化が行はれる様になればよいのである。

#### 2、長短の認識

二拍子又は三拍子にていろ／＼の變化あるリズムを奏し、之を直ちに間違なく復演せしめる様、リズムの把握を行ふ。かくして同じ二拍子又は三拍子でも、長短いろ／＼の音が組み合つて表れるものなることを認識させる。

次に把握したるリズム(長短の變化)を表す方法——音符を提示して、かゝるリズムはかく表すのであると、實際に唱奏し連絡して取扱つて行く。但し、初めは音符の名稱等を扱ふことなしに、その機能のみを授ける。二つ三つと習得せるリズム型が殖えるにつれて、弾かれ又は唱はれたるリズムがその何れなるかを發見させ、更に進んでは、把握したるリズムを音符を用ひて表現せしめる。茲で音符の名稱を授くる必要が生ずる。

#### 發想練習

自己表現としての唱誦には、當然發想が伴はねばならない、發想記號のある部分の局部的表情ではない。樂曲全体を通ずる感情の流れに伴ふ必然的情緒でなければならぬ。即



旋律リズム、ハーモニーの渾然たる統一の上に立つた表出でなければならぬ。かゝる表出は發想記號の外に樂曲に具備された形式全体を通じて歌曲融合より深き觀照によつて成されるのである。次に實際教授の場合について考へて見るに兒童は聴く事によつて發想の妙味を體驗し得ても自ら歌ふ場合になると相當の困難を感じる。これはどうしても發聲の修練によらなければならぬ。兒童にテクニクを強ひることは慎しむべきであるが、發聲の修練によらずして唱歌教授の目的は達し得ないと思ふ。

唱歌觀照より自己表現への到達として發想の自由に俟つこと大であると言ふべきである。

## 第十八章 成績の考查

### 大分郡大分部

#### 目次

- 第一節 音樂の本質及び唱歌科の目的
- 一、音樂の本質
- 二、唱歌科の目的

#### 第二節 考查要素

- 一、唱誦力
  - 二、鑑賞力
  - 三、知識
  - 四、學習態度
- 第三節 各學年の考查要素
- 一、教材系統案
  - 二、基本教材系統案
  - 三、各學年の考查要素表

#### 呼吸練習

巧妙に且つ齊一なる呼吸に依つて、音樂的の發聲を求め前提として行ふべきであるから、適切な急吸緩呼などを確實に且つ屢々練習するのが至當である。呼吸の方法には、胸式と腹式との二法があるけれども、唱誦する爲の便宜から言へば、兩者を折衷したる胸腹式呼吸法に據り、呼吸器官の凡てを利用して吸氣し、口腔のみから呼氣すべきである。この練習を行ふ場合には、濕氣や塵埃等の尠い快晴の日を期して行ふことが衛生的である。練習するに當り、呼氣を聲に變化させ、或はシ音などで氣息の平均と持続とを檢することも面白い方法である。

- 第四節 基本配點
- 第五節 實施の方法
- 第一 唱誦力
- 第二 鑑賞力
- 第三 知識
- 第四 態度
- 第六節 成績記入簿形式

### 第一節 音樂の本質及び唱歌科の目的

唱歌科は藝術的教科であつて、藝術の一部門である音樂の上に、その根柢を置くべきである。故に唱歌科の目的を明かにするには音樂の本質から考へて見ることを要する。

一、音樂の本質 さて音樂とは如何なるものか、これを説明することは極めて困難なことであるが、強いて定義的に言ふならば「音樂とは音を以て美的感情を表現する藝術である」と言ひ得るだらう。即ち音樂は律動和聲の原理に基き、無内容の音を以て感情表現の材料として示顯する藝術であつて詩と共に時間藝術に屬するものである。而して聴者の感情はその無内容の音に觸れて流れるのである。而してそれは全然主觀的なものであり、更に詩の場合の如く或對象と共感する感情でなくして我が内なる世界の反響である。意味なき自然の模倣、春の日の長閑な鳥の囀、大海の波濤の響等は未だ

音樂といふことはできない。何となれば感情は音樂の根本であり、音樂の生命は實に感情、靈の表現にあるからである。而して其の材料たる音響そのものは云ふまでもなく感覺的要素であるが、其の内在的意味即ち藝術の生命に觸れ、吾々の生命の純なる、若くは眞なる姿を吾々に開示する所に享樂及びそれ以上の價値を認める事ができる。これ音樂が教育に意義を生ずる所以である。扱つて音樂には受容すること、表現すること、の二方面があり、従つて音樂の享樂は此の二つの場合にある。而して他の藝術に於ける鑑賞と創作とのその如く、此の二方面は相關係するもので、受容は表現によつて益々深められ、表現は受容によつて愈々進められて行くものである。

二、唱歌科の目的 文部省教授要旨「唱歌ハ平易ナル曲ヲ唱フルコトヲ得シメ兼ネテ美感ヲ養ヒ徳性ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス」音樂による美的陶冶を目的として小學校に取入れたものが唱歌科である。然し唱歌は詩と曲との結合に成るもので、音樂に於て無内容の感情が流れるのみなるに反し、詩と結合するを以て内容ある感情を起さしめるものなのである。即ち内容ある歌曲を眞に歌ひ廣に聴く時、我々の美的創造力は一切の羈束を脱却して自由に發展する。そしてそ



の歌詞と曲との結合から来る内容ある感情の流は唱ふもの聴くもの、心情及び徳性を美的に陶冶するのである。以上を要約して本科の目的を述べると、「唱歌科は受容(鑑賞)と表現(主として唱詠)とによつて彼等兒童に音楽を理解せしめ音楽を味はせて、美に對する理解力と満足とを與へ、やがて美的感情を啓培し人格の向上に資する」となすべきである。究極目的たる美的陶冶は、内容ある歌曲を眞に唱ひ、眞に聴く、即ち純粹直觀の境地に到つて達せられるのである。故に本科の指導にあつても、眞に歌ひ、眞に聴き得る能力の養成を二大眼目とすべきは明となる。而して歌曲を正確に鑑賞せさせ、唱詠せさせる爲には音楽に對する知識鑑賞の門戸である聴覺の練磨、唱詠の門戸たる發聲機關の修練が必要條件となる。

### 第二節 考查要素

本科の目的をかくの如く見る時考查すべき方面は自ら明らかである。即ち(1)唱詠力、(2)鑑賞力、(3)知識の收得の度の三方面を擧げるべく、更に唱歌科を學習するに如何なる態度であるかを考へなければならぬ。この四方面について更に考查要素を考察して見ると、

- 一、唱詠力 唱詠とは豊富な内的心情が各種の音聲を通して表現されるもので、即ち各種の音聲が、音楽的法則(調子、拍子、節奏)に依つて藝術的に表現されたものと言ひ得るもので單なる音聲ではない。それで次の如き四要素によつて考查すべきである。
  - (一) 音聲の良否
  - (二) 拍子の正否
  - (三) 調子の正否
  - (四) 發想の如何
- 二、鑑賞力 鑑賞は内部的活動即ち、感情の働きであるが故にこれが考查は甚だ困難である。鑑賞することにより得た處の豊富な感情は多くは唱詠の上に表はれるものと云ひ得るであらうが、併し彼等兒童にありては内部的感情を充分發表示し得るの技術を有してゐないし、尙先天的に發聲機關に缺陷を有してゐるものは、如何に豊富な感情を有してゐてもそれを充分發揮する事ができない。こゝに於て考查の必要を感じるのである。考查すべき要素としては次の二要素が擧げられる。
  - (一) 聴音力
  - (二) 歌曲内容の味解の度

聴音力は鑑賞の基礎的修練であつて眞の鑑賞の部面と云ひ得ないだらうが便宜上茲に入れる。

- 三、智識 知識方面に於ける考查は次の三要素によつて爲し得る。
  - (一) 教授事項の理解の度
  - (二) 寫譜の正否
  - (三) 讀譜の正否、遅速

四、學習態度 よき學習態度は大體に於てよき結果として表はれるであらうが、如何に學習態度がよくても天稟に乏しくて、充分に結果を得難い者がある。かゝる者に對しては

大いに考へてやらなければならぬ。態度を見るべき要素としては次のものが擧げられる。

- (一) 音楽的趣味の有無
- (二) 熱心の程度

### 第三節 各學年の考查要素

各學年の考查要素の内容は該學年に配當された學習材料によつて定められる。學習材料としては本年度指定された文部省小學唱歌の教科書を基底とする。本項にては歌曲、補充、並びに鑑賞教材、知識教材を掲げたい。

#### 一、教材系統案

年 學 一 科 常 尋	歌曲補充	鑑賞教材	知識教材
電車 人形 金魚 牛若丸 星 私の妹 樂隊あそび	さくらさくら おきやがりこぼし 鳩つば、人形、雨 かたつむり、夕立、 ウマ 仕立屋と熊の話 菊の花、お月さん 木の葉 軍艦行進曲 樂隊あそび おもちゃの行軍 時計屋の店 花咲爺		



年學二科等高	年學一科等高	年學六科常尋	年學五科常尋
花観雷晩秋 雨江行瀑 (三重) のあはれ(三重)	秋花海残櫻 の散 聲火 花る	月も山夏水畫て湖 の居ののふ上の 瀬う美曙旅ふ花 た(本居)	朝こ落秋漁納花山雲 のも葉の業瓶の うり湖の歌涼花彦雀 た(山本)
グットバイ マドンナの寶石 ベイトーベン第五シンフォニー ワグネル作、ワルキューレ中の魔術	オーゲストラ各楽器 田園シンフォニー ハレルヤコーラス 千鳥の段 アベマリヤ チヤイコフスキー	子守歌民 流浪の民 チヤイコフスキーのトロイカ 死の舞踊 タランニノラナボリタナ 葬送行進曲	グリンカ作、雲雀 海賊船の歌 ヘンデルのラルゴ ウイリアムテルのくるみ割の組曲 スワイナムセルナード ラバニツシュレナード 死の舞踊
各國音樂ノ特質比較音樂發達ノ概要 樂聖 パツハ、ヘンデル、ハイドン、モツァルト、メンデルズゾーン、ショパ、リスト、ワーグナー、ブラームス、サンサー、チャイコフスキー等	日本固有ノ音樂 管絃樂ノ編成 聲樂ト器樂 日音階構成ノ法	長音階、短音階、終止記號(∥)、延聲記號(rit) 圓點記號(●)、垂點記號(⋄) 括弧記號( ) 反覆記號(∞) 臨時記號(♯、♭)ノ名稱、意義 調子記號(ニ、イ、ホ、變ロ、變ホ、變イ)	十六音符ノ形、名稱、曆時(四分音符ヲ一 拍トシテ) 加線ニヨル線間ノ名稱 調子記號(ト、調) 發想記號(f、p、mf、mp等ノ意義) 調子記號(ハ、調) 既出符ノ曆時(八分符ヲ一拍トシテ)ノ拍子 記號(6、8)ノ呼方、意義

年學四科常尋	年學三科常尋	年學二科常尋	飛行機
雪あそび 海 蓮の葉の露 タンク	山雀太夫 茶摘 汽車 とんび 山登り 鶴越	花と春風 おさるのひるね お父様のちつき かみなりさま 紅の葉 案山子 大お客様 だるま砲	飛行機 花と春風
小川のほとり グリンカのワルツ お山の大将 サンパインのフラスカ 虫の音楽 ムゼット イタリヤの歌 ママツルカ	森に於ける狩 青い目の人形 ガボット 汽車 かなりや、村祭 金婚式 モスコブスキー、セレナーデ シスコブスキー ミコエツト 益の光	雲雀 浦島太郎 蜜の蜂 シムン作、トマ坊と熊の遊山 紅葉、案山子 飛行機、おもちつき お客様、おもちつき 幼き人達 ホリホケキヨ	飛行機 雲雀、蜜の蜂、浦島太郎
高音符記號(ト字記號) 縦線、小節	附點二分音符ノ形ト曆時(四分音符ヲ一拍トスル)譜表線間ノ名稱譜表ノ見方 八分音符、八分休止符ノ形ト曆時(四分音符ヲ一拍トス)	四分音符、四分休止符二分音符ノ形ト曆時(四分音符ヲ一拍トシテ)	



二、基本教材系統案

種類	年	呼吸法	發音法	音域	音程	音階	聽音	拍子	發想	教法
		長持音の 讀	ア 母音法	ニ・ニ	ハ・ニ	二 度	五 三 音 制	長 音	打 節	歌 詞 ヲ 明 カ ニ シ
同上	同上	同上	子 變 音 形 法	ハ・ニ	二 度	高 低	踏 打 節	同 前	同	
同上	同上	同上	高 同 低 法	ロ・ニ	三 度	音 階	同	フ ヒ ツ 、 歌 味	同	
音階の連 續 速 唱	同上	同上	斷 續 法	ロ・ニ ホ	四 度	同 及 強 弱	同 及 強 弱	フ ヒ ツ 、 歌 味	視 唱 法	
同上	同上	同上	同上	ロ・ニ ホ	四 度	同	同	同	同	
同上	同上	同上	同上	ロ・ニ ホ	四 度	同	同	同	同	
同上	同上	同上	同上	イ・ニ ホ	四 度	變 同 形 式	旋 律 的	同	同	
同上	同上	同上	同上	イ・ニ ホ	四 度	同	和 聲 的	同	同	
同上	同上	同上	同上	女 男 イ イ ホ ホ	上	同	同	同	同	
同上	同上	同上	同上	女 男 イ イ ホ ホ	上	同	同	同	同	

三、各學年の考查要素表 (以上の如き系統案によつて各學年の考查要素は自ら明か  
さなるが併し學年によつて評價の困難なものは除いた。)

考查要素	學年	唱			語			鑑賞力			智識			態度	
		聲	拍	調	發	力	聽	歌	寫	讀	音	熱	音		
聲の良否	1	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
拍子の正否	2	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
調子の正否	3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
發想の如何	4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
歌曲味の度	5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
寫譜の正否	6男	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
讀譜の正否	6女	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
音樂的趣味の有無	高二女	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
熱心の程度	同上	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

備考○は○より、△は△印より重視すべき事を意味す。

第四節 基本配點

下表の如く配點したが、配點にあたりて次の事項を考慮した。  
□唱歌科の本質から考察すれば鑑賞と唱語とは同等に見る

知	鑑賞力	唱語力	考查方面	
			學年	配點
0	0	100	1	1
0	0	100	2	2
10	16	80	3	3
10	10	80	4	4
15	15	70	5	5
20	20	60	6男	6
15	15	70	6女	6
20	20	60	高二女	6



成績一覽表

氏名	唱詠力( )				鑑賞力( )				知識( )				學概				
	聲音	拍子	調子	發想	評語	平均	聽音	味解	得點	評語	理解	寫譜	讀譜	得點	評語	習態	評語

第六節 成績記入簿形式

通知簿の形式

要素	唱詠	鑑賞	知識	學習態度
重み				
第一學期				
第二學期				
第三學期				

成績原簿の形式

要素	唱詠	鑑賞	知識	學習態度	概評
配點					
第一學期					
第二學期					
第三學期					

べきものであるが、鑑賞力は多くは唱詠の場合發想として表はれるものであるから、發想の如何によつて鑑賞力を推定する事ができ、又鑑賞力は内面的感情の活動であつて全然主觀的であるからこれの考査は最も困難である。かゝる客觀的に考査し難き部面を配點上重く見る事は妥當を缺く嫌があるので斯點に留意した。

□六男に於て六女に比して鑑賞力並に知識を重く見たのは變聲期に入つて唱ふことが困難で思ふまゝに表現する事ができないから、その點に留意した。

第五節 實施の方法

第一 唱詠力

一、時期及び回数

唱詠力の考査は、平素獨唱を多くして診斷的に考査してその状態を標識にて記入し、その評價は學期末少くとも二回行ひ、評語と各要素の状態を標識にて記入する。

二、方法

同一材料にてなるべく同一時間に於て行ふ。評價については、唱詠は感情の表現であり、しかも瞬間的なものである。

第二 鑑賞力

のなるが故にこれの評價はいたつて困難である。が併し何かの方法で査定せなければならぬ。それには各考査すべき要素を念頭に置き教師の鋭敏なる聽覺を以て判斷し誤らぬ様査定するより他に方法がない。

第三 知識

一、鑑賞力は前述の如く内的心情そのまゝを測定することは不可能であるが、これが考査は、試問法により感じを書記させて見る事によつて大体をなし得る。

二、學期末一回行ふ。

三、材料は各學年理解し得る程度のもつて選ぶ。

第四 態度

一、教授事項の理解の度は試問法によつて各學期末一回行ふ。

二、寫譜の正否はノートの檢閲によつて見る。

三、讀譜の正否及び遲速は平素練習の際個人的活動を多くせしめ診斷的に考査し、評價は學期末試問によつて定め、その場合平素の考査をも參考とする。

態度は平素學習時に於ける状態に注意しそれによつて定める。



## 玖珠郡北部

### 目次

- 一、成績考査の價値及び目的
- 二、各學年の指導方針
- 三、考査すべき要素の決定
- 四、考査方法
- 五、考査の時期につきて
- 六、成績記入簿形式
- 七、考査上の留意點

### 一、成績考査の價値及び目的

力を見る  
勉強心を起させる

學習指導の本質である。

- 1、本科のねらふ「音樂性の陶冶美意識の啓培、人格の向上」所がどれ丈の徹底味があるか。
- 2、それに向つての教師の日々の努力が如何響いてゐるか。
- 3、兒童の音樂能力が如何に伸びつゝあるか。
- 4、之までの教授に於ける欠陥、不備の點の反省をし、之に

よつて個人指導の目標を定め、兒童の能力、素質に適應し本科學習の目的を達成する爲に行ふ。

- 5、兒童の側から云ふ時は、自己の相對的な價値を知り、學級といふ一社會に於ける自分の地位を自覺する重要な材料を提供されるのである。

### 二、各學年の指導方針（項目のみに止む）

- 1、一、二學年指導の主眼と其の實際指導項目

a、歌謡的本能を満足させてやる

唱ひたい、否唱はずにはおれないといふ氣分を満しつゝ音樂生活殊に歌謡生活に於ける色々の要素について基礎的な陶冶をはかることが目的である。

b、其の實際指導項目

イ、リズムカルに唱はしめること。

ロ、在學年兒童の發聲につき……叫ばせぬ事。

ハ、低唱の訓練……輕やかな低い聲調の態度をさす。

ニ、諦聽の訓練……全心をそれに傾け盡して聴くこと。

ホ、表現的快味への指導……發想の心地よさを深める。

ヘ、鑑賞的歌謡的態度の培養。

- 2、三、四學年の指導主眼及び指導項目

a、歌謡の美的表現を主眼として

歌ひたいと云ふ氣持の上に立つて、其の心持を出来る丈完全に達成せしめて行く様な表現的訓練が本學年期に於て大切な仕事である。

b、其の實際指導項目

イ、美しい唱ひ方への指導……前學年の發聲の上に更に美しい發聲へ。

ロ、樂典教授及讀譜力の養成

ハ、音域の擴張

ニ、基本の練習……聽音、音程練習につき

ホ、諦聽の訓練……發展して

ヘ、鑑賞的態度の養成

ト、表情的歌謡へ

チ、節奏美から旋律美へ

- 3、五六學年の指導主眼及び指導項目

A、歌謡による全我的表現

全我的表現とは即ち生命を打ち込んだ全人格的の表現を指すのであつて模倣や強制等で獲得出来るものではなく、自己の内面より湧出する底のものである。

B、詩的鑑賞から歌謡美へ

歌謡獨特の美即ち詩と音樂の渾然として融け合つて流れるリズムの美しさを歌ふこと及びこの美しさを自ら歌ひながらに味はしめることに中心をおく。

C、音樂的美的直觀の体験

美的直觀は純粹な氣持ちで藝術品に對した時のみ得られる。しかしこの直觀は鑑賞にのみ依つては深まらない。鑑賞の領域を越へて、表現にまで行くところに眞の深化があり強化があると思ふ。

D、視唱力の確立

本學年は前學年の後をうけて、視唱力の確立を期したい。即ち普通の唱歌や、童謡力は獨りで視唱し得る程度にまで。

E、和聲的訓練

この學年では二部三部等の輪唱が課されてあるので、それを土臺として和聲に對する耳の訓練を期したい。

F、發想の指導

兒童自身にいかにかに發想し、表情すべきかを發見せしめるやうにし、立派な全我表現にをはらしめたい。

- 4、高等一、二學年

A、歌謡的態度の確立



- B、鑑賞を主とする和聲訓練
- C、歌謡を主とする和聲訓練

各學年歌謡教授の主眼點及び取扱ひ方一覽

學年	主眼點	實際的取扱要項
尋常一、二學年	歌謡の本能の充足から歌謡的態度の馴致へ	歌謡的悦樂の味識 リズムミカルな歌謡 低唱の訓練 表情的感味 鑑賞的歌謡態度の培養
尋常三、四學年	歌謡中心としての表現	美はしい歌謡 節奏美から旋律美へ 低唱の訓練 表情的歌謡 鑑賞的歌謡態度の培養
尋常五、六學年	歌謡による全我的表現 音樂的美的直觀の体験	全我的表現にまで 詩的鑑賞から歌謡美へ 低唱 發想の招致 鑑賞を主とする訓練
高等一、二學年	歌謡的態度の完成 歌謡的教授法の完成	歌謡的態度の完成 詩的鑑賞から歌謡美へ 低唱 發想の招致 歌謡を主的とする訓練

……は發展を示す

……は延長を示す

### 三、考查すべき各要素の決定

以上の唱歌學習指導の目標を以て考查方法の目標として要素の決定をなすべきだと思ふ、その考查材料を次にあげると、

#### 1、唱謠力

- イ、發聲：聲質、聲量
- ロ、發音：母音、子音、鼻音、促音、唇音
- ハ、調子 ニ、リズム ホ、解釋 ヘ、表情

#### 2、鑑賞力

- イ、器樂にて
  - △概念的な音の形象の識別(リズム旋律)
  - △概念的な感情の訴へ方識別(理解判断)
  - △純粹音樂の形式美に對する識別(作家と作品の判断極めて高尚であるか?)
- ロ、聲樂につきて
  - △概念的な感情の訴へ方識別
  - △聲音の種類による識別(和聲美の認識力)

#### 3、知的方面

- イ、樂典事項——既習事項の理解の度、活用の度

#### 4、其他

- イ、學習態度——如何なる態度をもつて學習してゐるか  
努力する姿を認めてやる(殊に劣等兒に對して)
- ロ、一般知識——常識として知つてゐてもよいと思ふ事  
以上は一般的考查材料を書きたてたのにすぎず。次にその  
考查材料を各學年に分配して見る。

各學年の考查要素表(◎は○より○は△より重視すること)

要素	唱謠力		鑑賞力		學年
	正調子	正拍子	發想	聽音力	
聲の良否	○	○	△	△	1
拍子の否	○	○	△	△	2
調子の否	○	○	○	○	3
發想の如何	○	○	○	○	4
聽音力	○	○	○	○	5
歌曲の度味	○	○	○	○	6男
	○	○	○	○	6女
	○	○	○	○	高一女
	○	○	○	○	高一男



度 態	識 智		
	寫譜正否	正讀否	理解事項
熱心の有無			
態 度			
○			
○			
○			○
○		△	○
○	△	○	◎
○	○	◎	◎
○	○	◎	◎
○	○	◎	◎
○	○	◎	◎

各學年の基本配點表

智的方面	鑑賞力	唱 誦 力	考査方面	
			學年	配點
	5	95	1	
	10	90	2	
10	10	80	3	
10	10	80	4	
15	15	70	5	
20	20	60	6	男
20	20	60	6	女
25	25	50	7	高一
25	25	50	7	高一

#### 四、考査方法

##### 1、觀察法

##### イ、平常成績

唱歌考査の大部分をしめる。教師は兒童の齊唱、合唱中に或は獨唱中に細かな注意と敏感な聴覺によつて絶えず個人的或は全体的に觀察しそのつど書きとめ

それを平常點となす。日常の學習態度等も殊に觀察する必要あり。

##### ロ、一齊考査

同教材を同じ時間に各兒童に歌はせ、その成績を表示す。同一條件のもとに考査する事も必要であらう。

##### ハ、考査實施につき

△發聲……聲の出し方はよいかどうか。

△發音……正きか否か、美しいか歌詞につきて見る。

△口形……口の閉き度、音につきてのうごかしかた。

△音程

△聲質

△發想(表現力)……真に誦ひつゝ、味ひつゝの發想(低學年と高學年とは考慮を要す)

以上の事項を考慮に入れて総合的な歌ひ振りより平常點を取る、又一齊考査の場合も實施の方法につきては同じ事であるが、兒童の身体に異狀ある場合は適當なる處置を取らねばならぬであらう。

それを處決する上に此の日常成績は最も有力である。

##### 2、問答法(主として知的方面の調査になす)

外部に表はれた事を教師の問に對して答へさせる。

以上は主として筆答法である、又主として高學年に適用せらる。

△鑑賞力 次に例を上げると

1、器樂にて或曲を聞かせて如何なるものを得たか

如何なる感情を想起せしめたか(口答法)

2、聲樂にても同じ様な方法を取る

3、二重音、三重音唱歌を聞かして和聲美の認識力を見る(高學年)

4、純粹音樂の形式美に對する識別

高尚であるかどうか

以上は一般的の考査法であります。

これを各學年別の考査要素により、又學年の程度により

て一般的考査法を考慮し判定すべきだと思ふ。

學年別に考査法は記さす。

##### 五、時間につきて

1、目的から見て學習時間からみて——學習に即して行ふ。

2、學習時間の一部を之にあてて。

3、時間外に行ふ事もある。

4、學期末一時間をあて一齊考査なす。

發表能力の不充分又は發表し難き事項もあり、正確を失する事あり故に兒童の發達程度を考へ主として知識方面の調査に適用する。

##### イ、口答法

學習時間中簡單なる問答により樂典或は歌ひ方に関する理解の度、鑑賞の深さにつきて調査する。

##### ロ、筆答法

學習時間の一部をあて、教師の課題につきて筆答する

##### ハ、考査實施につきて

△樂典事項——既習事項の理解の度、活用の度

次に23の例をあげると

1、譜表上の縦線をぬきにしたものを兒童にあたへこれに縦線を記入さす。

2、拍子をぬきにしたものへ拍子記號を書かせ

3、強弱をつけさせる様な事である

##### △讀譜力

1、普通棒讀の讀譜

2、拍子に合はせての讀譜

3、音曲にあらはれたる讀譜

書かせ、歌はせることによりて力を見る

##### △曲譜筆記の正確度(記載力)



六、成績記入簿形式

氏名	唱 誦 力				鑑賞力		智 識		概 評								
	聲 音	拍 子	調 子	解 釋	發 想	得 點	評 語	聽 力		味 覺	得 點	評 語	理 解	寫 字	讀 書	得 點	評 語

七、成績考査上の留意點

- 1、根本條件として教師は音樂的特質の理解をなすべきである。
- 2、受持兒童の音樂性につきて殊に精細な調査をなすことが必要である。
  - イ、聽覺機能（和聲觀念、高度認識、音色識別、音程識別、リズム知覺）
  - ロ、基本條件（音樂的記憶、思索、樂典的素養、歌詞解釋、讀譜力）
  - ハ、情意方面（氣質、趣味性格）
  - ニ、音域：重要
  - ホ、環境
- 3、兒童の音樂的能力の發揮さるゝ全部に向つて測定する。
- 4、結果の處理
  - 個人差に適應する教育をなし本科の目的を達成させる。
- 5、音樂的機能の素質の研究には兒童心理的素質の研究と併用されねばならぬ。

結 び

書き終りましてふりかへつた時、我々が今日までこうした方面をあまり考へなかつた。それ文に非常に研究に困難を感じ

じました。しかし私共の歩みはかく精細に慎重な態度を以て兒童をみつめ、公平完全に考査してその表示を明確にし、目

的に向ふべく有利に活用されなければならぬ。

第十九章 兒童の音樂會

大野郡大野支部

目 次

- 一、目的
- 二、兒童音樂會の利點
- 三、兒童音樂會の農村に於ける範圍
- 四、農村兒童音樂會の取材の目標
- 五、取材の種類
- 六、練習方法
- 七、音樂會の單位
- 八、會 場
- 九、會期及回数
- 一〇、會後整理
- 一一、入場料
- 一二、總 括

一、目 的

- 1、兒童音樂性の伸展
- イ、めぐまれない農村兒童に環境を與へてやる。

ロ、右により聴き度い、歌ひ度いと言ふ生得的な本性に満足と與へ、新しい生命即兒童の人間性の陶冶に資せる。

2、社會人と學校唱歌、農村としては之が主  
社會人と學校唱歌を近接させる事によつて、學校唱歌を理解させ、さらに其の心を淨化し共に味ふまでに至らせ度い。前者に比して稍々自由でよい。

二、兒童音樂會の利點

- 1、技能の藝術的發表による。各自の長所短所の自覺が、教育的價值をもたらす。
- 2、刻苦學習の結果を知り將來の參考となる。
- 3、共に味ひ楽しみ得る。
- 4、音樂教育の向上。



### 三、兒童音樂會の農村に於ける範圍

農村音樂會即唱歌會

- 1、設備の不完全。
- 2、右により自然の狀勢として純粹な唱歌會でなくても、之に近い物となり勝である。

### 四、農村兒童音樂會の取材の目標

- 1、文部省小學唱歌中心
- 2、文部省小學唱歌以外
  - イ、正しい音樂性を邪道に陥らしめる様な所謂童謡を排す
  - ロ、文部省小學唱歌の伴侶として、さらにその足りない所を補ひ、兒童の音樂性を伸ばすに足る物でなければならぬ。

### 五、取材の種類

- 1、單位價值と程度から見た取材の種類
  - A、低學年
    - イ、齊唱  
個聲美で集合した多聲美を味はず、之を主体として

- ロ、獨唱  
演出者の個性を比較的發揮して、演出者並に被演出者の音樂的心情をしふる點で重要。之を従とする。
  - B、中學年
    - イ、獨唱  
Aの發展
    - ロ、齊唱
  - C、高學年
    - イ、獨唱  
Bの發展、さらに分野を廣くする。
    - ロ、齊唱  
Bの發展。
    - ハ、合唱  
リズムからメロディーへ、さらにハーモニーへの進展をたどつて和聲美にひたらす。
  - ニ、輪唱  
合唱の程度の容易な物として、同目的で採用
  - D、高等科  
Cの程度を高め、之に重唱を加へてもよい。
- 2、歌曲の氣分による取材の種類、

從來は審美的な物が多かつた様であるが、全教育的立場の氣分からも、効果的でない。故に之は全般にわたらねばならぬ。例示すると

- イ、審美感を表すもの
  - ロ、莊重感を表すもの
  - ハ、豪壯感を表すもの
  - ニ、諧謔感を表すもの
- 等々……

- 3、時代を考慮した取材  
國民志氣の振作又は英雄崇拜からの取材。

### 六、練習方法

- 1、從來の通弊
    - イ、普通授業
      - 無系統であつた
      - 抽象的であつた
      - 所謂音樂會の爲の練習
    - 不即兒童心理
    - 技術陶冶の過重視
  - ロ、急激無自覺な練習
  - 劃一的になり個性を無視する
  - 訓育に悪影響
- 2、正しい練習

### 七、音樂會の單位

- 1、學級學年
    - イ、普通授業の正しい取扱ひの徹底。
    - ロ、課外練習に就いては以上弊害を考慮して
  - 特殊な者に對する指導
  - 一般授業の比較的劃一なものを個別的に
  - 會場訓練に注意して實際的に
  - 常に程度に應じて批判的態度をとらせ練習と態度の効果向上を期す。
- ハ、有志の者の練習。
  - ニ、練習に伴ふ兒童訓練の徹底をはかること。

### 八、會場

- 1、會場の選擇



イ、演出効果の充分である所。

ロ、教育的に見て環境に弊害を生じない所。

ハ、音楽會の單位によつて規定すること。

2、會場の設備管理養護

イ、美化して會場の氣分を高揚すること。

●背景は教育的に考慮されねばならぬが、會の單位によつては自分に考へねばならぬ。

●其他全体的に美化すること。

ロ、衛生方面に留意すること。

ハ、聴衆の位置を考慮すること。

ニ、演出者の位置を考慮すること。

ホ、演出者の動作の整理に注意すること。

ヘ、事故に對する用意をすること。

ト、夜間

●照明方法に留意すること。

●特に事故等の注意をすること、チ、係員を規定すること。

### 九、會期の回数

1、會期

イ、農繁期を避けること。

ロ、他行事との關係を考慮して決定すること。

ハ、其他特殊事情を考慮すること。

2、回数

イ、學校單位

農材としては各學期一回乃至二回。

ロ、學級學年單位

イを除いて同じく一回乃至三回。

ハ、聯合單位

聯合其の物の範圍、目的等によつて考慮されねばならぬのであるが大体に於いて一回乃至二回。

以上概括であるが右の外種々の特殊事情は其の都度充分に考慮して全教育の遂行に遺憾のない様にしなければならぬ。出来るだけ回数が多いことは無論希ましい。

### 一〇、會後整理

1、各兒童の感想相互批判

イ、相互の向上

ロ、兒童の深さ

ハ、兒童の傾向

將來の指針とする。

2、教師の感想發表批判 ①の注意指導。

3、今後の留意點に就いて注意。

4、社會人聴衆の態度感想批評をきき、將來の指針とする。

### 一一、入場料

必要なし。現在に於いては…寧ろ排する。

### 一二、總括

しかして此の會を益々盛んにならしめる者は教師であつて社會の人は其の一部しか擔當しない。

過去を省る時

1、教師と教師、兒童と兒童、父兄と父兄の競技會。

## 第二十章 唱歌教育の諸施設と其の活用

### 南海部郡北部

#### 一、序言

二、唱歌教室

三、樂器

1、ピアノ

2、オルガン

3、グアイオリン

4、蓄音器及レコード

四、發聲指導と其の設備

2、衣裳の展覽會。

3、宣傳的音樂會。

4、教育を無視した社會娛樂の會合。

等の如く、随分損われた會に陥つてゐるが、之を是正する事の出来る者は教師である、故に之に向つて最善の努力を盡してその健全な發達を計らねばならぬ。

●音樂教育觀の確立

要するに我々教師は全教育の上に建てられた此の音樂教育が、兒童精神の培ひであり、兒童の音樂性をすこやかに育て、全教育に貢獻する物であること等、音樂教育觀の確立を第一として此の向上に盡すことが大事である。然る時は種々な問題も暫定的に解決される物であらう。



- 1、口形圖
- 2、音階圖
- 五、樂典教授と其の設備
  - 1、五線塗板
  - 2、啞鍵盤
  - 3、本譜教授用掛圖
- 六、拍子指導と其の設備
  - 1、指揮棒
  - 2、メトロノーム
- 七、其の他の施設及び活用
  - 1、音樂繪掛圖
  - 2、唱歌掛圖
- 八、結論

## 一、序 言

唱歌教育上先づ第一に必要なことは、それに要する設備の完成である。完全なる設備なくしては眞の徹底せる唱歌教育は望まれない。其の實現の能否は別として、それには如何なる施設を必要とするか、如何なる場合に如何に使用し利用すべきかにつき述べることにする。

## 二、唱歌教室

外界の雜音を一切避け、微細な音もよく聴こえ、且つ歌つた際に其の聲が適度に共鳴し得る位置にある教室、若しくは

然ういふ装置を有する教室、明るくて氣持の好い衛生の理法に適つた教室は唱歌教室として最も理想的である。此の點に於て講堂や雨天体操場等を唱歌教室代用とするは最も不適切である。其の理由は前述の外に注意の散漫し易いこと、自然的に聲が荒くなること等の弊害あればなり。

然らば其の理想とするところは

- イ、教室の廣さは餘り廣過ぎても又狭過ぎても不可、通例四五十名内外の兒童を收容し得る縦五間横四間位の廣さが適當である。
- ロ、天井の高さは普通教室よりも三四尺高い位がよい。
- ハ、壁は單に厚くする計りでなく色の配合にも亦注意を要する。明るくて氣持のよい色を選ばなくてはならぬ。白は上品なれど汚れ易く、淡柿色又は山吹色は軟か味あり且つ明るくて最も適當である。水色は涼しさを感ずるから夏向にはよいが冬向でない。尙室内の反響をよくし軟か味ある共鳴をさせる方法として、コルク張りの壁にすること等は最も理想的である。

ニ、室内の裝飾は最も有意義である。裝飾の語は稍々語弊があるかも知れぬが、適當なる學習をなすべき環

境の謂である。室内の凡ての空氣が何となく音樂的調和的になされてゐると言ふことは既に夫自身兒童によい影響を與へる譯である。併しそれが華美であつてはならぬ。華美は寧ろ弊害である。矢張りどこまでも藝術的、音樂的、教育でなくてはならぬ。例へばベートーヴェンの月光の曲を弾いてゐる繪、子供が樂しそに歌を歌つてゐる繪等々の貼附、其の他四季折々の草花等を花瓶に挿んで置く等最も有意義なことと思ふ。

## 三、樂 器

- 1、ピアノ  
近時洋樂の普及發達に伴ひピアノが漸次一般小學校に備へ付けらるゝやうになつた事はまことに喜ばしい傾向である。されば之が購入に當りては餘程の調査研究を必要とする「音色とタッチの可なるもの」を其の選定の第一條件とすべきである。型は平臺がよい。堅臺は生徒の管理にも又其の教授に於ても不便であるため學校教授用には不適當で寧ろ家庭用練習用として適切である。タッチも平臺程はよくない。

## 2、オルガン

現今小學校唱歌教授に用ふる樂器の最も主なるものである。凡ての樂器の生命として完全なるアクションを有し、ハッキリしたよい音色と正しい調子を有つた樂器でなければならぬことは論を俟たない所である。殊に現今小學校唱歌教授に用ふる樂器としてオルガンは其の王座を占めてゐる。全國小學校兒童の殆んど大部分は此の樂器にのみによつて教育されてゐる。されば此の樂器の精選には餘程の注意を拂ふべきであると共に、一面教師自身は此の樂器の構造、特性、使用法等につきての研究をなさるべからざるは極めて緊要な事であり、且つ之が奏法について大いに其の技術上達に力めざるべからざるなり。

## 3、ヴァイオリン

ヴァイオリンは音が澄明であり、又よく浸徹する特質を有つてゐる。加之、音の強弱、陰影を最もよく表すことが能きる。而も其の音域は兒童の聲音に恰當し且つ其の音質も兒童の聲音に餘程よく似通つてゐる。又弓の使ひ方によつてリズムを示し且つ音の連續、結合、アクセント等を正確に導くことが出来る。而も此の樂器は携帶に



便であるから教師は何時でも兒童の正面にて演奏して見せることが出来る。然れ共此の楽器は調子を外さない様に弾くと云ふ事が非常に困難である。此の楽器でイヤな弾き方をされる程聴き苦しいものはない。調子を外づし無茶な拍子と自己流の悪い癖で以て弾く位なら寧ろ止めた方がよい。されば眞に卓越せる技倆を有する教師に於て之を使用することは非常に有益なるも、さもなくば人に於ては寧ろ使用せざる方安全無害である。

#### 4、蓄音器及びレコード

今や蓄音器とレコードは孰れの小學校、中等學校に於ても必要欠くべからざる教具となつた。幸にも之が研究は近年非常に進歩して實に精巧なる殆んど肉聲其のまゝを出す様な物さへ出来て來た。鑑賞教育上蓄音器の必要は論を俟たざるところであるが、粗悪なる蓄音器の音は寧ろ聴かせない方がよい。雑音多、音のハツキリした恰も肉聲其のまゝを聴くかの如き感じのするものでなければならぬ。

レコードの選擇には又充分の注意を拂ふを要す。其の選擇標準は大體蓄音器の選擇法に準ずる。兎に角優秀なるものを可成多く集めて聴かすべきである。少くも小學唱

歌の範唱レコード(可成同年兒の歌つたもの及び左に表せる器楽曲の一通りの形式は備へ置く必要がある。而も可成一流大家の吹込んだものが好い。

イ、聲樂の部

a、女聲：ソプラノ、アルト  
各：獨唱、二重唱、三重唱、四重唱  
b、男聲：テノール、バス

ロ、器樂の部

a、絃樂器：ヴァイオリン、ヴィオラ、セロ、コントラバス

h、管樂器  
木管樂器：ピッコロ、フルイット、クラリネット、ホルン  
金屬樂器：トロンベット、コルネット、ホルン

c、打樂器：シロホン、シンバル、トライアングル  
太鼓の類

d、有鍵樂器：ピアノ、オルガン

#### 四、發聲指導と其の設備

##### 1、口形圖

正しき發音をなす爲には各部の發聲器官が最も合理的に而も有機的に統制されなければならぬ。其の最も主なる

關係と働きをなすものは開口の度合と舌の位置である。

發聲の基礎たる之が口形練習を徹底會得せしむるため鮮明な氣持よい圖によつて之を練習せしむることは唱歌教育の第一歩として最も緊要なことである。尙平面鏡に向はせて各兒に自己の口形練習をなさしむることも一方法と思ふ。されど最も理想とするところは教師の正しい示範が何よりも有効なことと思ふ。

##### 2、音階圖

全音、半音の區別鮮明なるものを要する。初歩の唱歌教授に於て兒童に音の高低觀念を得しめ、且つ音程視唱に便ならしむる爲必要欠くべからざるものである。而して活用自在ならしむるため巻物或は掛軸にして自由に懸外しの出来る様になしおくべきである。

#### 五、樂典教授と其の設備

##### 1、五線塗板

本譜視唱法上必要欠くべからざるものである。其の大きさは通例四五十人位を收容し得る教室に於ては線の大きさを一分位とし、各線の間隔を大凡七八分、則ち第一線より第五線までの隔りを大體三寸位にするのが適當だらうと

思ふ。上下の二線は中の三線より稍々太めにするるとハツキリする。

##### 2、啞鍵盤

發聲、音程練習用としても大いに必要であるが便宜此の部に挿入した。ボール紙又は厚紙にて適宜の大きさに作り教室の前面に貼附して置くとも最も便利である。樂典教授上必要欠くべからざるものであると共に兒童の樂器演奏指導には是非必要である。兒童練習用オルガン、ピアノの備へ付けある學校としては尙更である。

##### 3、本譜教授用掛圖

初歩の基本となる樂典の概要を掛圖にしておくことは最も便利である。常に教室に備へ付けて實際教授に當つては適宜之を使用し得るやうにしておく。

#### 六、拍子指導と其の設備

##### 1、指揮棒

全兒童の注意を一點に集中せしめるのみならず拍子觀念の未熟なる低學年兒の教授に於ては大いに必要とするのみならず、指揮棒は其の歌曲の藝術的働き換言すれば速度の弛張緩急は勿論其の他一切の發想を殆んど遺憾なく



この形匡の中に置くことが出来る。それ故指揮棒は多人数の合奏若しくは合唱の場合にそれを統一するために最も必要であつて、其の際指揮者は恰も自分が演奏者の如き態度で其の団体を自由自在に支配するだけの力量がなければ眞の表現をなすことが出来ぬ。

#### 指揮棒の使用法

- イ、強 聲……強 く
- ロ、弱 聲……軽く、小さく
- ハ、増 聲……次第に大きく
- ニ、減 聲……次第に小さく
- ホ、流暢なる曲想……曲線的に
- ヘ、活潑なる表情……直線的に
- ト、延聲、静止……止める

#### 2、メトロノーム

凡て楽曲には一定の速度がある。速度は曲の精神を表はす上に於て最も重要な一要素である。而して歴時を精密に示す場合にはメトロノームの使用は是非共必要である。かくして正確なる拍子觀念は培はれゆくものである。

### 七、其の他の施設及び活用

#### 1、音楽繪掛圖

音楽と繪畫とは最も關係の深いものである。教師の拙い説話よりも鮮明にして而も藝術的、音楽的な教育的價値ある繪畫を直觀鑑賞せしむることは最も有意義にして遙かに有効なることと思ふ。

#### 2、唱歌掛圖

修身科に讀方科に理科に其の他の學科に於て新教材取扱ひの場合は勿論同教材を數回に亘つて教授する場合に於ても掛圖使用の有益且つ必要なることは多言を要せざるどころなり。唱歌教授に於ても大いに其の必要と價値を認むるものなり。即ち

- イ、教授時數少き唱歌教授に於て大いに時間を節約することが出来る。
- ロ、教材はどこまでも永久的生命のある佳作を擇ばなければならぬ以上之を掛圖にしておくことは最もよい。
- ハ、子供の筆記に誤りが少ない。
- ニ、子供が歌を忘れても困ることがない。
- ホ、何時でも復習が出来る。

### 八、結 論

以上の施設が唱歌教育上理想のものではない、唯實際教育上之だけの施設は是非共必要なることを述べたに過ぎぬ。完全なる設備なくして眞の仕事の能率は擧げられぬ。經濟不況の今日逼迫せる農山漁村の小學校に於ける唱歌教育上の施設と言つたら丸でお話にならない状態である。殊に他教科のそれに比して餘りに閑却され無視されてゐるの状態にあることは何を物語るものであらうか。唱歌教育上の諸施設を如何に運用し活用するかについては極めて簡単に述べたが、教育は結局人にある。要は教師其の人の人格的修養と音楽的知識の修得、音楽的技術の修練と相俟つてはじめて眞の活用も爲し得られる。宜しく教育の實際に携はる者其の責任の重大性を鑑み以て唱歌教育否國民教育の伸展を期しなければならぬ。

## 大野郡宇目支部

### 目 次

- 一、時籍の蒐集
- 二、教授細目の編成

#### 1、編纂上の二大眼目 2、編纂上の諸注意

#### 3、編纂の方法

#### 三、環境的施設

- 1、唱歌教室 2、樂 器
- 3、教具一般 4、裝飾具類

#### 四、唱歌教育家としての人

- 1、人格的修養をなすこと
- 2、理論的修養をなすこと
- 3、技術的修養を怠らないこと
- 4、教授法の研究に努むること

#### 五、結 論

### 一、書籍の蒐集

樂譜も歌曲もなく唯一冊の参考書さへもない寂寥たる學校に於て、如何に努力しやうとも其の成績を擧げることには至難事であらう。よろしく書籍類を豊富に集めて活動を起し着々として實績を擧ぐべきである。

#### 1、樂譜歌曲類

文部省の檢定済、採用認可済其の他直接に歌謡せしめな  
いまでも、あらゆる方面の歌曲集。



## 2、参考書

指導の理論實際方法及び技術の修練等教師の實力養成の好指針となるべき参考書。

## 二、教授細目の編成

唱歌科の如く一定の教科書なく、標準の明示なきものにあつては、教授の系統秩序は一に細目によつて支配される。故に細目の編纂は最も大きな問題である。次に編纂上の二大眼目と其の作製上の注意と方法を記さう。

### 1、編纂上の二大眼目

イ、基本教練、唱歌教材、樂典事項、鑑賞教材等を系統的に排列し、一目瞭然たらしむべきこと。

ロ、各學年の教材配當並に基本事項は、論理的心理的兩方面より考慮して編成さるべきこと。

### 2、編纂上の諸注意

イ、教材選擇を誤らざること

ロ、各學年指導要點を明かにすること

ハ、練習時間を豊富にすること

ニ、基本教練の系統的排列をなし置くこと

ホ、教材に對する指導要點を明示し置くこと

### 3、編纂の方法

イ、教材學年、學期、月、週、時間等精細なる區分配當をなすこと

ロ、記入欄には教授に關する進度、指導要點及び主眼點練習、基本練習の配當、他教科との連絡の有無、困難點の豫想、教授後の反省等。

ハ、編纂趣意を明示すること

ニ、教授者自ら作成すること。他人の模倣や形式に捉はれては價值が少い。

ホ、材料の蒐集を廣くし、選擇標準に照して取捨すること。

ヘ、郷土唱歌として鑑賞教材の採擇を怠らないこと。

ト、作業的取扱を豫定して置くこと。

## 三、環境的施設

### 1、唱歌教室

イ、音樂唱歌の學習に適するやう、音の共鳴と漏洩とに注意し、室の明るさを必要とする。従つて講堂雨天体操場等の使用は教師の辛苦もさこそであり兒童の歌謡はそれ以上である。

ロ、唱歌中は呼吸作用が盛んなるため、塵芥の飛散せぬやう工夫すること。

ハ、教授用具、裝飾、掃除用具等の整理整頓をなし置くこと。

ニ、心意を爽快ならしめる場所。陰鬱な所は樂器のためにもよくない。殊に一瓶の花がどれだけ我々の心を爽快ならしめるか。

ホ、普通教室、体操、手工教室に離れた場所であること。

ヘ、暑熱寒氣が特に烈しくつく且つ出入の餘りに不便でない場所。

## 2、樂器

イ、ピアノを以て最も理想的教授用樂器とする。

ロ、續いてオルガンの具備。

ハ、樂器の調子は常に正確に保つこと。不良なる數個は善良なる一個に及ばないからである。

ニ、樂器の手入を怠らず、よく之を愛し活用すること。

ホ、鍵盤樂器は常に音域の狭い小學唱歌の伴奏に使用されてゐるので、最低音部は一向に使用されることが少い。大いに教授外といへども活用すること。

ヘ、ペーパオルガン

最少限數個乃至それ以上を必ず具ふべきである。即ち樂器教授の全く顧みられてゐない現状から推して

若し速かに此の指導が行はれたならば、樂音の觀念は明確に養はれ、兒童の才能と趣味とは充分に發揮され、學習態度も自學態度も訓練されて數等優秀なる成績の擧げ得られることを確信する。

### ト、蓄音機

鑑賞用として使用する蓄音機は、相當權威なる調子の正しいものを設備し、レコードは保存に注意し、共に出し入れと使用に至便なるやう工夫すること。

### チ、其の他

ヴァイオリン、ハーモニカ等

### 3、教具一般

#### イ、教壇

普通のものより三四寸高い方が指揮上好都合であり低學年に於ては廣さも廣い方が唱歌と遊戯とを共に行ふ方面からよい。

ロ、五線板は二間長さで明瞭な五線を必要とし、黄色を理想的とする。尙赤色白色も落着いた感じを與へる

ハ、教卓、教鞭、小黑板



ニ、兒童用机腰掛 寫譜臺の必ず附いてゐるもの。

ホ、指揮棒 裝飾的でなく又餘りに殺風景でないもの、白色又は黒色を理想とする。

ヘ、メトロノーム 完全なる拍子を有するもの。

ト、鏡 面 口形の整正に必要である。

チ、鍵盤 盤

古オルガンの鍵盤か或は模型に依つて、調子と鍵盤との關係を實地に指導する。

リ、唱歌用掛圖類

なるべく教師の手に依つて成される事を理想とする如何に高價なものでも古い黄色を呈したシミ付の萬年掛圖は教育的でない。

式日唱歌々曲圖

音階圖

音階練習表

音階練習表

讀譜練習表

口形圖

拍子圖

音符圖

諸記號圖等

又、各種五線紙の用意

低學年に大きく高學年に至つて普通のもの

4、裝飾具類

イ、生花、造花又は盆栽

ロ、額面、樂聖樂家の肖像

唱歌は感情の陶冶をなすものであるが故に、相當に此の方面には注意し、樂聖の額の如きは崇高の念を與へて美感養成の一助となる事が大切である。

#### 四、唱歌教育家としての人

如何なる教科に於ても教師の修養なしに教育の成立せぬことは自明の理であるが、殊に唱歌科に於ては、感情と感情との接觸であり、技術が其の奥に感情を揺り動かして理屈では通らない。又兒童が之を通して呉れないものである。茲に於て、善き唱歌教育家たるには一層の人格修養を必要とするは勿論、教育に對する各種の研究が必要である。廣い立場から音樂教育の本質を究め、高い音樂教育理想を樹立し、深い教育的根底を築かねばならぬ。左に一貫した修養意見を述べて見やう。

#### 1、人格的修養をなすこと

讀書と聽講に依つて、自己の識見を高め常に自己反省をすると共に、快活溫雅な人格修養に努力せなければならぬ。中でも教育家として自己の短所を矯める意志がなくてはならぬ。

#### 2、理論的修養をなすこと

教育理論と共に、音樂理論を究め、常に思索の態度に於て自己のものとせなければならぬ。新を銜ひ舊をけなし獨斷を以て満足する常識を排さねばならぬ。更に築きあげた理論的修養は實際的研究に依つて益々意味も強め我も深めて行かなければならぬ。

#### 3、技術的修養を怠らないこと

音樂家とは異り其の方法は専門的でなくとも、態度に於ては決して負けない努力が好ましい。唱ふ、弾く、タクトする力は教授の大黒柱である。例へば新定文部省唱歌伴奏用が、見たゞけで奏し得ない位の技術では教授を一人任することは危まれる。

#### 4、教授法の研究に努むること

常に講習會、研究會、批評會等に出席して、平素の所信を打明けて批評を乞ひ、大きな心で天下に酷評を待つ態

度がなければならぬ。演奏會やラヂオに迄兒童引率して批評を請ひ、腕試しすることは全くよい修養にならうと思ふ。

#### 五、結 論

以上唱歌教育の諸施設事項を擧げ、且つ其の活用に及んだ譯であるが、要するに唱歌科實績の擧否は、指導者其の人の學校經費の問題如何である。即ち、人の問題が解決され、學校が其の人の活動し得べき状態にあるならば唱歌教育の向上は現代より數等以上の目覺ましいものがあることを確信する。

日 田 郡

#### 目 次

- 一、序
- 二、音樂教室
- 三、樂 器
  - 1、ピアノ
  - 2、オルガン
  - 3、ヴァイオリン
- 四、五線繪板
- 五、指揮棒
- 六、メトロノーム
- 七、掛圖類



- 八、唱歌帳 九、裝飾用額面  
一〇、花瓶 一一、饗賓方面

## 一、序

與へられた題目の諸施設に就ては、何の屈托もなく、すらすらすら書くことが出来るが、其の活用に就ては相當苦しい、何分、此の種藝術教育施設の活用は、曰く言ひ難し、活用の如何は教授者の如何による、あの場合は、あんな工合に、この場合にこんな工合にといふ様に、始めから決定しかゝることは相當困難の問題だ。

尙次に述べる施設の項目を見ただけで、誰もが其の活用法を知つてするし、研究題目が二十もあるのだから、誰かが、其の活用法に就ては述べるものと思ふ、又述べなければならぬ題目があるやうじや、それではかへつて、蛇足の嫌があるから、活用法に就ては略する事にした。とにかく、現在に市町村經濟の逼迫せる際だから、以下述べるやうな施設は到底望まれぬものと思ふ。まあ此の内の二、三でも出来たら、此上もない喜びとせねばならぬ。

## 二、音楽教室

- 2、オルガン：山葉の二百圓程度のものでたら充分だ。  
3、ヴァイオリン：鈴木の拾圓程度のもを、一挺常備しておきたい。

ピアノ、オルガン、ヴァイオリンの特質を促へ、其の奏法を充分に會得して、活用を誤らざるやう注意せねばならぬ。即ちピアノの特質は、音量が大で表情力に富んで其の上音が發揚的であつて、快活的明瞭兒童の心情に適してゐる。オルガンは宗教的なそして、沈靜させるやうな暗さのあるのが缺點だが、ピアノに比べて價が易く、地方小學校の唱歌教育になくてはならぬものだ。ヴァイオリンは音が澄明であり、且つ強弱陰影を最もよく現すことが出来る。音質も兒童の聲に餘程似通つてゐる、其の上音の連続、結合、アクセント等を正確に導くことが出来る。

## 四、五線塗板

塗板の大きさ縦四尺四寸、横六尺のもの二板、五線は淡黄色がよい様だ、線の太さを一分五厘位、各線間を一寸位、即ち第一線より第五線迄の巾を大略四寸位にするのが適當、別に小塗板二枚、片面には五線を引いたものが必要だ。本譜視唱法教授にはなくてはならぬ備品。

四間と五間、天井の高さ二間位、四隅は丸く、床はリノリウム張り、一間半の廊下をつけるとして、坪當り七十圓の約貳千圓である。壁色は淡柿、カーテンは淡色毛織物、座席は四寸上り、腰掛は二人用机、教壇は巾六尺、中央孤型、横二間、高さ五寸等、考へたら際限がなく、どう少く見積つても參千圓はかゝるだらう、こんな事は夢であつて、現在の市町村豫算では無理だ。財算品の寄附といつても一寸困る。だが少くとも、音楽教室は普通、特別教室等より相當の距りがあり、日當りのよい温氣のない明るい場所を選びたい、それも出来なければ、普通教室で、前述の條件に近い室を選択して、種々の施設は教師の汗で、最も經濟的と美化を計る事だ。

## 三、樂器

- 1、ピアノ：アブライトで千圓以上、グラントで千五百圓以上の品だつたら日本山葉製で充分だ、スタンウエノ等獨乙のマークの必要は更でない。市町村の豫算を當にせず、學区内の有志の寄附を仰ぐが最も近道、前述の値段以下だと、變色も悪く、破損し易く、年々の調律費も相當かゝるし、どうかと思ふ。

## 五、指揮棒

長さが一尺五寸内外で、先端が特に明瞭なるもの、自分で體裁よく拵へてもよいが、一圓内外で相當上等なものを賣つてゐる様だ。

タクト棒は全兒童の注意力を一點に集注させ、其の拍子を整へると都合がよい許りでなく、歌曲の弛張緩急は素より一切の發想を一本の棒で畫く事が出来る、だから全奏合唱の場合には、それを統一する爲に必要だ。

## 六、メトロノーム

十五圓内外のもので、二四、三六の各拍子毎に鈴のついてるものが小學校では適當と思ふ。すべて樂曲には一定の速度がある、速度は曲の精神を表す上に於て最も重要な要素である、此の歷時を正確に示す場合に必要なのが此のメトロノームだ。子供に示範する場合はメトロノームによる教師の練習がまず先決問題だ。歷時を大体に示す場合は、伊太利語のアダチオ、アンダンテ等の語が示されてゐる。



## 七、掛圖類

申す迄もなく、掛圖の具備すべき要件は、解明で、且つ兒童の了解の最も適切なるものでなければならぬ。製作の場合には必要な部分だけを示して、不要な部分を省かねばならぬ。その爲には、なるべく巧みな教師が自ら作製することが、經濟的であつて、要領を得たものが出来る。

○、音階圖：初歩の唱歌教授に於て兒童に音の高低觀念を得しめ、且つ音階視唱に便利である。

全音と半音の區別を明瞭に

2、口形圖：發音矯正の爲に必要だ、圖は開口の度合、舌の位置が必要だから、正面圖の外に断面圖を附け加へねばならぬ。

3、簡單なる樂典一覽表：樂理を示す簡單なものを作製しておくこと。

4、音程練習圖：系統的のものを作製しておくこと。

5、唱歌掛圖：新教材を提供する場合に之を塗板の上に書き示すことは、勿論それでよいが、同じ教材を數回に亘つて教授する場合、何回も板書することは、音に時間を空費する許りでなく、實に馬鹿げた話だ。

し、獨唱し聞かせることだ。所が全唱、合奏となれば一人の教師のよくする所でない、どうしても機械による鑑賞、多く蓄音機に頼らねばならぬ。

○、蓄音機……唱歌教室常備のものならば、ビクター百圓程度のもので充分、だが運動場、講堂等で使用するならば、電氣蓄音機が必要だ、まあビクター級で三百五十圓以上、粗製ナショナルで百五十圓以上

2、レコード……鑑賞用レコードの數は非常に多くて選擇に甚だ困難、豫算を考へ、兒童能力を主体として可成購入する事だ。

だから各學年の適當なる教材で、永久性生命のある佳作を選び、勞を惜しまず、各學年、各學期別と製作する事だ。

6、各種樂器圖……各種樂器の圖を描いて掛圖とし、レコード鑑賞等の場合に多く使用することにした。

## 八、唱歌帳

式日唱歌及檢定済の唱歌が二三十回尙終りの方に筆記用五線紙が十枚許りついて、十五錢内外で賣出されておる様だ。之を尋四以上に持たせてはどうかと思ふ。

## 九、裝飾用額面

樂聖ベートヴェンの寫眞、其他靜物風景等の感じのよいものを數面準備したい。

## 一〇、花瓶

四季の草花を適宜挿入して氣分を引立てる。

## 一一、鑑賞方面

鑑賞教育を如何に行ふべきか、何よりも教師自身が、演奏

(イ) 聲樂之部 (日本人、日本語のものが可)

男聲、女聲、合唱、童謡、唱歌

(ロ) 樂器之部

絃樂、彈樂、管樂、オルガン

(ハ) 合奏之部

管絃樂、吹奏樂、ハーモニカ合奏

(ニ) 曲の形式上より

子守唄、民謡、描寫樂、ソナタ

(ホ) 其他 (日本人、日本語のものが可)

兒童劇、歌劇、對話唱歌



唱歌科正會員名簿

西國東郡

學校名	會員名
桂陽	江藤 晃
草地	菊川 ツルヨ
河内	財前 四日生
田染	阿部 キツ
西都甲	辛島 マサエ
田原	坂本 スエ
吳崎	井上 エイ
東都甲	中野 トキエ
波多	平野 アヤコ
眞玉	大波 多達郎
三浦	宇都宮 圓學
香々地	能丸 ツチコ
三重	佐藤 學
白野	渡邊 季子

東國東郡

學校名	會員名
楓江	角園 雄
西武藏	後藤 マツエ
朝來	安部 サダエ
安岐	小川 ユキノ
南安岐	淵上 常子
豐洋	甲斐 春子
護江	溝口 キミ
堅來	田口 ナミ
大恩	郷司 アサカ
富來	安部 ツヤ子
上國東	郷司 ヨシ
豐崎	宇都宮 美子
國東	鹿島 正士
小原	重末 重信

速見郡

學校名	會員名
旭日	加藤 千代子
武藏	魚返 照子
武溪	津山 ヒサ子
熊毛	箕迫 光子
竹田	末松 一枝
伊美	藤本 鐵男
櫛來	澤宮 房子
姫島	津崎 コズエ
岐部	青山 シズカ
向田	猪俣 スエ子
來浦	吉岡 トミ
上伊美	鹿島 ナルミ
八坂	大石 キクエ
杵築	阿部 弘毅



朝東南石大川藤日小豐川立上金山東山向山大東  
日山立石垣神崎原出田岡崎石水香香野浦內

山溝二後谷吉工安栗阿阿古楠竹柴阿笠松宮本  
村口宮藤藤野藤部林部武部屋繁田南置原本多  
マサ天ハル光正安盛滿武五敏幸龜信杉八千キ秀  
ツエガ子エ子行子男雄郎好勝子義人男代シエ雄

松明高桃三鶴別八日東東神瀧  
岡治田園佐崎保幡岡大分尋崎尾  
名

大分郡

木河田高石渡首河田三重秋三波  
本野原屋崎邊藤野北野吉浦浦邊  
一郎憲一子一夫喜夫子ヨシエ郎孝  
田中照子 田中正子 加藤茂子 吉良ハル子

谷挾内由石賀朴種野東詰諏判端河竹上吉戸下  
村間成川城來木田津原種田訪田登原内中次野次  
次

佐挾阿佐園築油渡生安御三野江丸吉首油森丸  
藤間部藤田城布邊野達手浦田藤山田藤布布山  
夏秋次ユ富サ一憲七春洗治八隆キ藤八千幹ト  
枝子枝エ子エ郎一郎馬信子代代介ク丈代一シ  
ラ

北海部郡

湯直南東西長阿西大  
平山庄庄内野南庄内内留  
村山下曾山村甲佐曾河坂  
山静子ヨモモヨエ積エシズ子喜

津川石高山佐森村滋  
田崎川山山藤藤山野ス  
一武キトト波マアス  
夫雄ミエ夫エヤエ

日越白木神小大川坂佐大千下津青白下  
代智木佐崎佐佐井在添市賀關志生怒浦久江江  
尋

板井ヨネ 佐々木猪平 池部徳市 上杉ヒツエ 小坂ハナ 甲斐初男 妻城良夫 佐藤直 三島カツ子 齊藤サツエ 吉田ノブエ 竹尾ひさゑ 和田千代子 三重野ツムエ 平野キクエ 元野テル 後藤久子

南海部郡

八東沖大蒲床直大西因切丹青上木佐  
幡雲鶴入江木見間浦尾畑賀山堅田立伯  
名

渡濱船野津羽佐加西高田加足金並狩今  
邊口越々野野柴藤藤村畑畑原藤立田河生井  
良マ下一敏弘キ榮武武涉享彦幸ハキ輝到  
栗正ツ太雄弘ミ一一人涉享彦幸ハキ輝到



有明 堀田正路  
吹寄 村上隆

### 大野郡

學校名 野津市 川登 南野津 戸上 田野 三重第一 三重第二 新田 小野市 重岡 合川 長谷川 小富士 緒方  
會員名 伊達正人 廣田馨 森迫スギエ 青木波江 和田千秋 三宮巴 牧田榮 首藤常盤 小野衛吉 田原勤 衛藤キク 高山艶子 佐藤スミ 後藤タマエ

上緒方 二宮秀夫  
牧口 生野正義  
久部 岡久一郎

### 直入郡

學校名 大野町北部 大野町東部 大野町南部 大野町中部 西大野南部 上井田 大野町西部 井田 柴原 犬飼 長谷  
會員名 小田原ツルキ 眞部春映 加藤寶城 立花ユキコ 衛藤ヨシ 衛藤ミチコ 森ミヤ子 秦次彦 武藤重子 惠良トク 井手徳夫 長野ヒサエ 阿南春男 工藤シメヲ

宮城 阿南ミヤ子  
志土地 丸野百代  
城原礎 田仲スヰミ  
稻葉 志賀義夫  
久住 田西富美子  
菅生 三重野キシエ  
玉來 藤田端  
荻田 阿部秀雄  
入田 日浦タケ  
長湯 清水オチヨウ  
阿蘇野 三浦テルコ  
宮砥 堀ヒサコ  
白丹 原尻馬人  
姫嶽 武宮チドリ

### 玖珠郡

學校名 東飯田 八幡  
會員名 後藤ツネ子 日野はつ 田坂ミキ

### 下毛郡

學校名 山口 和居 鶴居 大幡 如水 新昭 三保 眞坂 鉢水 深井 城井 下郷 三郷 溝部 西谷 津民 槻木  
會員名 奈木野クニヨ 向ヒサエ 平原三郎 柏原リエ 春山笑子 武信忍 永松ソワ 椋園ウサ子 奥永アサノ 相良郁子 渡邊幸恵 延國文雄 佐藤巖 原藤静 井上アサノ 岡田種二郎 宗像秀丸

### 宇佐郡

學校名 封戸 宇佐 長洲 四日市 豐川 豐川 麻生 驛館 長峯 高家 兩川 鑑材 東院内 院内 南院内 南院内 明治  
會員名 鶴田フシ 宮田フシ 石丸治 松永宏磨 岸文子 上田トミ 廉政之 津々見悟 木部力 岩崎トメ子 吉松文子 竹下万次郎 時枝タツ 久保サカエ 木村壽 中山二十日 宮丸義睦

### 日田郡

學校名 森南部 古後 小田 塚脇 戸畑 内河野 野上 朝日 明倫 准國 栗野  
會員名 江藤美登里 淵野 中山直記 梅木ヒデ子 小幡綾子 元松八重子 帆足保 宮本輝夫 古後キミエ 武石キミエ 安藤學 梶原實 野上文明 水江ヤチヨ 高瀬ミサ子 平岡ナ、エ 石井



津房  
安院内

生山昇  
細川呈

中津市

豊田

南規矩郎

別府市

北別府高等

首藤幸人

野口

熊谷貞子

南田

高田政夫

大分市

南大分

山中武夫

中島

加藤嘉一郎

荷揚

外川治郎

春日道日  
大分高等

安部政男  
宮崎末子  
大塚一仁  
梶原七三



# 昭和九年度 体操科 唱歌科 教育大研究會日程

大分縣師範學校附屬小學校

日	時刻	第一日(八月八日)	第二日(九月九日)
時	9:00-9:45	体操科研究會	唱歌科研究會
	10:00-10:45	体操科實地授業	唱歌科一般授業
時	11:00-11:45	体操教育研究問題討議	唱歌教育研究問題討議
	1:00-1:45	全上	全上
時	2:00-3:00	附屬小學校体操科主・副主任研究發表	唱歌研究授業批評會並に附屬小學校唱歌科主・副主任研究發表
	3:00-	講評	講評

## 研究會當日の行事内容並に進行順序

第一日(十一月八日木曜日) 体操教育研究會(自午前九時至午後四時)  
 第二日(十一月九日金曜日) 唱歌教育研究會(自午前九時至午後四時)

日	時	行事
日	7:00-10:00	体操科實地授業
	11:00-後3:00	体操教育研究問題討議 發表題目並に發表郡名
時	2:00-3:00	研究發表
	3:00-	講評

日	時	行事
日	9:00-9:45	唱歌一般授業
	10:00-10:45	唱歌研究授業
時	11:00-後3:00	唱歌教育研究問題討議
	2:00-3:00	研究授業批評會 研究發表表
時	3:00-	講評

### (曜木日八月一十) 會究研育教操体

尋一男 とせとせる取扱 大池訓導	尋二男前全 松山訓導	尋四女全 教程扱佐藤訓導	尋六男前全 奥訓導	高二男 懸垂跳躍を中 心とせる取扱 芦刈訓導	五以上男女 新定縣体操 体操科部員
1 体育新傾向の検討 北海郡	2 各學年の指導方針 玖珠郡	3 体育施設と其の活用 大分郡	4 懸垂運動の使命と其の指導 速見郡	5 跳躍運動の使命と其の指導 南海郡	6 倒立及轉廻運動の使命と其の指導 日田郡
7 教練教材の使命と其の指導 西國東郡	8 体育ダンスの使命と其の指導 別府市	9 競争遊戲の使命と其の指導 下毛郡	10 球技の使命と其の指導 中津市	11 運動の結合(複合)取扱並に 一單元の合理的指導法 宇佐郡	12 雨天及夏季冬季の体操 大野郡
13 薄弱兒・異狀兒の取扱 東國東郡	14 課外体育の計畫と實施上の 諸問題 大分市	15 体育行事の計畫と實施上の 諸問題 直入郡			

### (曜金日九月一十) 會究研育教歌唱

尋一男 菊の花 (リズム訓練を中 心としたる學習)	幸訓導	尋三男 鶴越 (本譜視唱を加味 したる學習)	藤原訓導	尋四男 昇る旭	高瀬訓導
1 教育音楽の史的考察 速見郡	2 唱歌教育の目的 玖珠郡	3 唱歌教材の標準 東國東郡	4 唱歌教材の選擇配列 大分郡	5 國歌式日唱歌 西國東郡	6 各學年の指導方針 中津市
7 聴唱法とその指導過程 大野郡	8 視唱法とその指導過程 直入郡	9 樂譜指導の系統的的研究 別府市	10 兒童の發聲法 大分市	11 唱歌に於ける特別兒童の取扱 日田郡	12 唱歌と遊戲 宇佐郡
13 鑑賞指導の實際 北海郡	14 基本練習 下毛郡				



唱歌科研究會	唱歌科	唱歌科	唱歌教育	全上	唱歌研究授業批評會 並に附屬小學校唱歌科 主・副主任研究發表	講評
一般授業	研究授業	研究問題	討議			

## 研究會當日の行事内容並に進行順序

第一日(十一月八日木曜日) 体操教育研究會(自午前九時至午後四時)  
 第二日(十一月九日金曜日) 唱歌教育研究會(自午前九時至午後四時)

日行事		日行事	
7:00-10:00	体操科實地授業	7:00-10:00	体操科實地授業
10:00-11:00	体操教育研究問題討議 發表題目並に發表郡名	10:00-11:00	唱歌教育研究問題討議
11:00-11:30	研究發表	11:00-11:30	研究授業批評會 研究發表
11:30-	講評	11:30-	講評

日行事		日行事	
7:00-9:00	唱歌一般授業	7:00-9:00	唱歌一般授業
9:00-10:00	唱歌研究授業	9:00-10:00	唱歌研究授業
10:00-11:00	唱歌教育研究問題討議	10:00-11:00	唱歌教育研究問題討議
11:00-11:30	研究授業批評會	11:00-11:30	研究授業批評會
11:30-	講評	11:30-	講評

### (附記)

#### 研究討議の方法

- 1、前記題目の發表者は一名の郡代表によりて行ふ。
- 2、發表時間は五分以内。
- 3、發表者は郡の意見をまとめ、可成文章發表(研究録)の主要點或は意見發表の事。
- 4、發表郡以外の正會員は、發表内容並に文章發表(研究録)に就き質疑、或は意見を述べ。
- 5、質疑を受けたる郡は、郡選定の正會員之れに應答する。
- 6、以上二項四項目と五項目は議長(主事)の許可を得て行ふこと。
- 7、正會員各位は、研究會當日まで、可成研究録を熟覽相成りたし。
- 8、正會員各位は當日研究録持参のこと。

(曜金日九月一十)會究研育教歌唱

○尋一女 菊の花 (リズム訓練を中 心としたる學習)	○尋三男 幸 訓導	○尋四男 昇る 旭 (本譜視唱法を中 心としたる學習)	○高一・二女 流浪の民 (鑑賞を中心とし たる學習)	富尾訓導
○尋五女 銀杏 (創作的學習)	眞淨訓導			
1 教育音楽の史的考察	速見郡	2 唱歌教育の目的	玖珠郡	3 唱歌教材の標準
4 唱歌教材の選擇配列	大分郡	5 國歌式日唱歌	西國東郡	6 各學年の指導方針
7 聽唱法とその指導過程	大野郡	8 視唱法とその指導過程	直入郡	9 樂譜指導の系統的研究
10 兒童の發聲法	別府市	11 唱歌に於ける特別兒童の取扱	日田郡	12 唱歌と遊戯
13 鑑賞指導の實際	北海郡	14 基本練習	下毛郡	15 唱歌教育の諸施設とその利用
	南海郡			

(曜木日八月一十)會究研育教操体

尋一男 遊戲を中心 とせる取扱	大池訓導	尋二男 前全	松山訓導	尋四女 全教程扱	佐藤訓導	尋六男 前全	奥訓導	高二男 懸垂跳躍を中 心とせる取扱	芦刈訓導	五以上 新定縣体操 体操科部員
1 体育新傾向の檢討	北海郡	2 各學年の指導方針	玖珠郡	3 体育施設と其の活用	大分郡	4 懸垂運動の使命と其の指導	速見郡	5 跳躍運動の使命と其の指導	南海郡	6 倒立及轉廻運動の使命と其の指導
7 教練教材の使命と其の指導	西國東郡	8 体育ダンスの使命と其の指導	別府市	9 競争遊戯の使命と其の指導	下毛郡	10 球技の使命と其の指導	中津市	11 運動の結合(複合)取扱並に 一單元の合理的指導法	宇佐郡	12 雨天及夏季冬季の体操
13 薄弱兒・異狀兒の取扱	東國東郡	14 課外体育の計畫と實施上の 諸問題	大分市	15 體育行事の計畫と實施上の 諸問題	直入郡					



昭和九年十月廿五日印刷  
昭和九年十一月七日發行 (非賣品)

大分縣師範學校附屬小學校  
唱歌体操教育研究會代表者

編輯兼  
發行者 中村精行

印刷者 高山通男  
大分市碩田橋通九二五

印刷所 高山活版社  
大分市碩田橋通九二五



